

宇都宮共和大学の地域社会連携・地域貢献ポリシー

宇都宮共和大学は、須賀学園の教育理念を踏まえ、大学の目的として、「時代の潮流と社会の要請を見極め、常に知識と能力を向上させるとともに大学を地域社会における知的交流の場とし、さらに経済、教育、文化の振興と社会の向上に貢献できる人材を育成することを目的とする」（学則第1条）と定めている。

宇都宮共和大学は、栃木県内に3つのキャンパスと活動拠点を有しており、学園の100年を超える伝統を生かしながら、絶えず「まち」、「ひと」に視点を当て栃木県央を中心とする北関東圏の「地域社会」の経済、教育、文化の向上と発展のために貢献することを目的とする大学である。

この目的を達成するために、本学は、「社会連携・社会貢献に関する方針」を次の通り定める。

1. 目的と使命

本学は、地域社会と連携し、時代の要請に応え、将来地元で地域社会の発展に貢献し、活躍できる人材を養成することに努める。

2. 産学官の連携

本学は、企業、自治体、各種団体・組織、市民等と積極的に連携し、地域社会の発展に貢献できるように努める。

3. 地域活動の拠点

本学は、本学の有する教育・研究資源を積極的に地域社会へ提供し、地域の教育・文化活動の拠点となるよう努める。

4. 地域貢献活動への支援

本学は、教職員・学生が、研究・教育の成果を地域社会に発信する活動及び教職員・学生が地域の活動や行政施策の助言者等として参画することを積極的に支援する。教職員は、「宇都宮共和大学コンプライアンス規程」の重要性を認識し、高い倫理観を持って行動する。

(平成29年11月1日制定)

子育て支援研究センター年報 第14号 2024

目 次

I. 子育て支援研究センター2023年度公開講座報告	1
II. 地域の就学前施設との交流を取り入れた保育者養成教育実践報告 市川 舞・桂木 奈巳	2
III. Tiny（障がいのある子どもと家族の支援）実践報告 大島 美知恵	19
IV. 親子遊びの会—子育てネットワークづくりプロジェクト—実践報告 小野 貴之・杉本 太平	31
V. 地域産学官連携活動報告	37
1. 自然遊びの会・行事实践報告	37
2. 大学地域連携活動支援事業「親子遊びの会」	41
3. 大学コンソーシアムとちぎ第20回学生&企業研究発表報告	48
4. 宇都宮市環境学習センター事業報告	52
5. 宇都宮共和大学・宇都宮短期大学×ミナテラスとちぎ 「大学連携親子ワークショッププログラム」報告	57
VI. 宇都宮共和大学子ども生活学部 卒業研究	61
1. 2023年度卒業研究一覧	61
2. 全国保育士養成協議会関東ブロック協議会 第37回学生研究発表報告	63

資 料

I. 2023（令和5）年度 子育て支援研究センター事業報告	69
II. 2023年度専任教員の社会貢献活動（子ども生活学部）	75
III. 宇都宮共和大学子育て支援研究センター規程	79
IV. 宇都宮共和大学客員研究員に関する要領	81

I. 子育て支援研究センター2023年度公開講座報告

1. 公開講座の概要

1. 目的：幼稚園教諭・保育士や子どもの教育・保育に関わる仕事に従事している学校教職員・行政職員・一般市民を対象に、その専門的知識や技術を研究し、あわせて大学教員と交流することを目的として、連続講座を開講する。
2. 2023年度テーマ：乳幼児期の保育の質の重要性
3. 場所：宇都宮共和大学・宇都宮短期大学 長坂キャンパス 5号館（第39回）
4. 日程と講座内容

第39回 講演会 10月28日（土） 13：30～15：30	気になる子どもの理解と支援 昭和女子大学大学院生活機構研究科心理学専攻特任教授 藤崎 春代 氏
--------------------------------------	---

<第39回>

講師：藤崎 春代 氏

発達心理学・発達臨床心理学の研究を専門としつつ、長年、保育園での巡回発達相談を臨床実践活動とする。巡回発達相談活動を通し、障がいをもつ子どもや障がいを疑われる子ども、保育者がちょっと気にしている子ども、多くの保育者と出会う。障がいをもつ子どもや気になる子どもを含めた保育の取り組みを通して保育者自身が成長する契機となる発達相談に取り組む。

Ⅱ. 地域の就学前施設との交流を取り入れた保育者養成教育 実践報告

子ども生活学部 准教授 市川 舞
教授 桂木 奈巳

1 はじめに

子ども生活学部の開設以来、地域の就学前施設との交流保育を授業に位置づけ、実践してきた。幼稚園教諭一種免許状および保育士資格取得に係る学外の実習に加えて、授業を通して子どもと出会い、子どもから学ぶことができるこの取り組みは、本学の保育者養成教育の特色の1つでもある。学生にとっては、実際の子どもの姿から「子ども理解」や保育の基本「環境を通して行う」の理解を深める機会として、大学教員にとっては、交流保育を参観したりサポートしたりすることによって学生の実態や課題をとらえ、自身の授業実践やカリキュラムを振り返る機会となっている。さらに連携園にとっては、保育実践を地域に開く機会として、また、本学の教育資源－自然豊かな森やグラウンド、広いアリーナ、学生・教員などの人材等－を活かすことで世代間交流をしつつ子どもの経験をより豊かにする機会として活用いただいている。

今年度は、本学の校地「子どもの森」を活かした来校型の交流保育に加えて、学生による教材提案を試みた。学生による教材研究を活かし、連携園のご協力により保育を実践させていただいた。本稿では、令和5年度の取り組みの概要について報告する。

2 令和5年度の交流保育計画

令和5年度の交流保育の計画を表1に示す。今年度は宇都宮市内の就学前施設5園と連携し、年間計11回の交流保育を実施した。そのうち、「子どもの森」を活かした交流保育は4回実施し、いずれも1～2年生の学生が参加した。また、学生による教材提案を中心とした交流保育は3～4年生の学生を中心に、7回実施した。

表1 令和5（2023）年度 交流保育計画

「子どもの森」を活用した交流保育

認定みどりこども園 岩本真砂枝園長（宇都宮市西原町3335-2）

- ① 日 時：2023年5月31日（水） 1-2限 年長児53名
 テーマ：春の自然に親しむ
 関連授業：「保育内容環境」「保育内容総合演習Ⅱ」「保育内容表現」（子ども生活学部2年46名）
 主 担 当：桂木、月橋

認定しらゆりこども園 岩本春枝園長（宇都宮市若草4-13-12）

- ② 日 時：2023年6月1日（水） 年中児96名
 テーマ：春の自然に親しむ
 関連授業：「フィールドワークⅠ」「生活講座Ⅰ」「保育内容総合演習Ⅰ」（子ども生活学部1年54名）
 主 担 当：桂木、市川
- ③ 日 時：2023年11月22日（水） 年中児96名
 テーマ：秋の自然に親しむ
 関連授業：「フィールドワークⅠ」「保育内容総合演習Ⅰ」「保育内容総論」（子ども生活学部1年54名）
 担 当 者：桂木、市川

学生による教材提案を活かした交流保育（4年生の実践）

テーマ：いろいろな遊びを楽しもう
 関連授業：「保育内容総合演習Ⅳ」履修者（子ども生活学部4年53名）
 主 担 当：市川、田淵、桂木、小野

つるた保育園 徳原省市園長（宇都宮市鶴田町3361-22）

- ④ 日 時：2023年4月11日（火）～14日（金） 4日間 10：00～11：30
 内 容：観察を通して幼児の実態を理解する
 場 所：つるた保育園
 引 率：市川、田淵、桂木、小野、星
- ⑤ 日 時：2023年4月26日（水） 9：30～11：30 5歳児クラス36名
 主な教材：体を動かして遊ぶ、布、新聞紙、土粘土
 場 所：長坂キャンパス アリーナ
- ⑥ 日 時：2023年5月10日（水） 9：30～11：30 4歳児クラス30名
 主な教材：段ボール箱、布、空き缶、草花、土粘土
 場 所：長坂キャンパス グランド
- ⑦ 日 時：2023年5月17日（水） 9：30～11：30 3歳児クラス30名
 主な教材：段ボール箱、草花、土粘土
 場 所：長坂キャンパス グランド

学生による教材提案を活かした交流保育（3年生の実践）

テーマ：一人でも、みんなでも楽しい伝承遊び
 関連授業：「保育内容総合演習Ⅲ」履修者（子ども生活学部3年生46名）
 主な教材：凧、こま、とんとん相撲、ひっくり返し、ごむとび、わらべ歌遊び、鬼ごっこ
 主 担 当：桂木、市川、月橋、小野

認定しらゆりこども園

- ⑧ 日 時：2023年1月10日（水） 年中児96名
 場 所：長坂キャンパス グランド、アリーナ

認定みどりこども園

- ⑨ 日 時：2024年1月17日（水）
 場 所：認定みどりこども園 引率：桂木、市川

認定こども園釜井台幼稚園 山崎英明園長（宇都宮市下岡本町4548-4）

- ⑩ 日 時：2024年1月17日（水）
 場 所：認定こども園釜井台幼稚園 引率：小野、杉本、田淵

風とみどりの認定こども園 熊倉 仁園長（宇都宮市下栗631-2）

- ⑪ 日 時：2024年1月17日（水）
 場 所：風とみどりの認定こども園 引率：月橋、星

3 「子どもの森」を活かした交流保育

3-1 ① 認定みどりこども園 交流保育

- 1) 日 時 2023年5月31(水) 1 - 2 限
- 2) 場 所 長坂キャンパス 子どもの森
- 3) 参加者 認定みどりこども園 年長児53名、引率保育教諭5名、主任1名、運転手2名
子ども生活学部2年生46名
- 4) 主担当 桂木、市川
- 5) テーマ 春の自然に親しむ
- 6) 活動の流れ

時間	子どもの活動	学生の動き	備考
9:10		・学生集合、出席確認 活動の留意事項の確認、環境整備	・身支度確認 ・トイレに踏み台
10:30	○来校 (10:10園バス発予定) ・学生駐車場に到着 ○森の探検 (到着順に順次) ・森を探索し、発見や見立てなどを楽しんだり、体を動かしたりしながら、森の自然に親しむ	・見守りを中心としながら、子どもの活動を観察する。 〔 ・立ち入り禁止区域の入り口 ・倒木など安全面の配慮が必要な場 〕 ・子どもが話しかけてきた際には応じる。 ・子どもの発見や疑問を受け止めつつ、子どもに返す関わりとなるように留意する。	・安全には十分に留意し、体調不良やケガ等は必ず保育者に報告する ・子どもの様子に留意し、適宜水分補給する ・お手洗いにいきたい子どもはアリーナに誘導。保育教諭に必ず報告。
11:40	○帰園		

7) 活動の様子

年少児の頃以来、2年ぶりの来校となった年長児であった。森でみつけた「自分の発見」を友達や学生、教師に知らせたりイメージや考えを伝えあったりしながら、生き生きと活動する姿が見られた。



木って重い！



木のなかにアリの巣発見

3-2 ② 認定しらゆりこども園 交流保育 第1回

- 1) 日 時 2023年6月1日(木) 1-2限
- 2) 場 所 長坂キャンパス 子どもの森
- 3) 参加者 認定しらゆりこども園 年中児96名(4クラス)、引率 保育教諭9名
子ども生活学部1年生54名「フィールドワーク」「保育内容総合演習Ⅰ」
- 4) 主担当 桂木、市川
- 5) テーマ 春の自然に親しむ
- 6) 活動の流れ

時間	子どもの活動	学生の動き	備考
9:10		・学生集合、出席確認 活動の留意事項の確認、環境整備	・身支度確認 ・トイレに踏み台
10:10	先発 園出発		・森の入口に消毒設置
10:30	○先発来校(ゆり⑳、ひまわり㉓) ・森の学生駐車場に到着 ・森の探検 発見や見立てなどを楽しんだり、体を動かしたりしながら、森の自然に親しむ	・見守りを中心としながら、子どもの活動を観察する。 (・立ち入り禁止区域の入り口) (・倒木など安全面の配慮が必要な場) ・子どもが話しかけてきた際には応じる。	・安全には十分に留意し、体調不良やケガ等は必ず保育者に報告する ・子どもの様子に留意し、適宜水分補給する
10:55	○後発来校(こすもす㉔、すみれ㉕) ・森の学生駐車場に到着 ・森の探検 発見や見立てなどを楽しんだり、体を動かしたりしながら、森の自然に親しむ	・子どもの発見や疑問を受け止めつつ、子どもに返す関わりとなるように留意する。	・お手洗いにいきたい子どもはアリーナに誘導。保育教諭に必ず報告。
11:25	○先発帰園		
11:55	○後発帰園		

7) 活動の様子

昨年度、年少児の頃に来校した子どもが、年中児となり再び「森」を楽しんだ。周囲の環境への視野が広がる年中児に、自分なりの気づきや発見を楽しんでほしい、という園の保育者のねがいから、年中児の参加となった。「年少の時に行った森に、また遊びに行く」期待感をもち、「前もあったよ」「前と違うね」「新しく見つけた」と、森の探索を楽しんでいる様子だった。



木の皮に虫を発見!



水の中に何かいるよ!

3-3 ③ 認定しらゆりこども園 交流保育 第2回交流保育

- 1) 日 時 2023年11月22日 (水) 1 - 2 限
- 2) 場 所 長坂キャンパス グランド
- 3) 参加者 認定しらゆりこども園 年中児96名 (4クラス)、引率 保育教諭9名
子ども生活学部1年生54名「フィールドワーク」「保育内容総合演習Ⅰ」
- 4) 主担当 桂木、市川
- 5) テーマ 秋の自然に親しむ
- 6) 活動の流れ

時間	子どもの活動	学生の動き	備考
9:10		・学生集合、出席確認	・身支度確認
10:10	先発 園出発	活動の留意事項の確認、環境整備	・トイレに踏み台
10:30	○先発来校 (ゆり⑳、ひまわり㉓) ・森の学生駐車場に到着 ・森の探検 発見や見立てなどを楽しんだり、 体を動かしたりしながら、森の自然 に親しむ	・見守りを中心としながら、子どもの 活動を観察する。 〔 ・立ち入り禁止区域の入り口 ・倒木など安全面の配慮が必要な場 〕	・安全には十分に留 意し、体調不良や ケガ等は必ず保 育者に報告する
10:55	○後発来校 (こすもす㉔、すみれ㉕)	・子どもが話しかけてきた際には応じ る。	・子どもの様子に 留意し、適宜水分 補給する
11:25	○先発帰園	・子どもの発見や疑問を受け止めつ つ、子どもに返す関わりとなるよう に留意する。	・お手洗いにいきた い子どもはアリー ナに誘導。保育教 諭に必ず報告。
11:55	○後発帰園		

7) 活動の様子

今年度2回目の来校となり、「森の地図」を頭に描いているのか、活発に森を駆け巡り、めあてをもって探索する姿があった。前回よりも視野が広がり、子ども同士の伝えあいも盛んになり、「〇〇に～があったよ」など子ども同士で伝えあう姿も見られた。



お気に入りいっぱい



「葉っぱが浮いてるよ!」

4 4年生による教材提案型の交流保育 ーつるた保育園との交流保育ー

4年生の学生による教材提案型の交流保育を計画し、4月から5月にかけて計4回の交流の機会を得た。第1回は学生が園を訪問し、子ども実態を捉えた。観察からとらえた子どもの発達や興味・関心から子どもの姿に即した保育を展開できるように、それぞれの学生が教材研究を行い、交流保育を計画した。交流保育は、3歳児クラス、4歳児クラス、5歳児クラスと学年別に計3回来校いただき、実践した。

4-1 ④ 第1回交流保育（保育参加・観察）

- 1) 日 時 2023年4月11（火）～14日（金）10：00～11：30
- 2) 場 所 つるた保育園（宇都宮市鶴田町3361-22）
- 3) 参加者 子ども生活学部4年生「保育内容総合演習Ⅳ」履修者46名
（4グループに分かれ、上記日程一日1グループ参加）
引率 市川、田淵、桂木、小野、星
- 4) テーマ 園生活における子どもの実態（発達、興味・関心など）をとらえる
- 5) 活動の流れ

時間	子どもの活動	学生の動き
9：50		・学生集合、出席確認、健康チェック表の確認 活動の留意事項の確認
10：00	・クラス活動 ▶3歳児：クラス活動（製作）、好きな遊び（ごっこ遊び、絵本など）、園庭で好きな遊び（砂場、バイク、固定遊具など） ▶4歳児：クラス活動（製作）、好きな遊び（ごっこ遊び、絵本など）、園庭で好きな遊び（バイク、砂遊び、おにごっこ、固定遊具など） ▶5歳児：園庭で好きな遊び（おにごっこ、虫探し、砂場、バイクなど）、体操教室	・園長、主任にあいさつ 保育参加の注意事項確認 ・保育に参加させていただく ・安全には十分に留意し、体調不良やケガ等は必ず保育者に報告する *子どもの興味・関心、子どものペースに沿って遊ぶようにする
11：30	・給食準備	・園長、主任講話 ・帰校

6) 活動の様子

保育への参加・観察期間を4日間設定いただき、4グループに分かれ、各1日ずつ、教材研究を担当する年齢のクラスに配属いただいて保育に参加・観察させていただいた。いずれの年齢においても、保育室内での遊びの様子、園庭での遊びの様子を観察させていただき、身体や手指の動き、友達との関わりをはじめとする発達の特性や興味・関心の所在を探る機会となった。

観察からとらえた子どもの姿から教材研究を進めることとし、主な教材として土粘土、段ボール箱、新聞紙、布、自然物など子どもの生活に身近な環境を教材として取り上げることとした。

4-2 ⑤ 第2回交流保育 5歳児クラスとの交流保育

- 1) 日 時 令和5年4月26日(水) 1-2限
- 2) 場 所 長坂キャンパス 雨天によりアリーナ
- 3) 参加者 つるた保育園 5歳児クラス36名(4/26) 引率保育士4名
子ども生活学部 4年「保育内容総合演習Ⅳ」履修者53名
- 4) 主担当 市川、田淵、桂木、小野
- 5) テーマ いろいろな遊びに親しもう
- 6) 活動の流れ

時間	子どもの活動	学生の動き	備考
9:10			・健康確認
9:30	○来校 ・遊びの紹介をみる ・環境の探索	・出席確認、環境構成 ・遊びの紹介をする ・グループごとに環境構成、遊びを提案する	・事前によく子どもの姿をリサーチし、子ども自ら関心をもって取り組むことができる保育環境を構想する
10:00	○好きな遊び ・体を動かす：巧技台 ・新聞紙・土粘土・布	・見守る、励ます、一緒に活動するなど、子どもの実態に即しつつ、子どもが主体的に活動するよう援助する。 ・時間の見通しを伝え、片付けを伝える・振り返り	・担任保育士も一緒に活動していただく
11:00	○片付け		
11:30	○帰園		

7) 活動の様子



サーキットを組み替えてコースづくり



はっけよーい、のこった！布で土俵



土粘土いっぱい

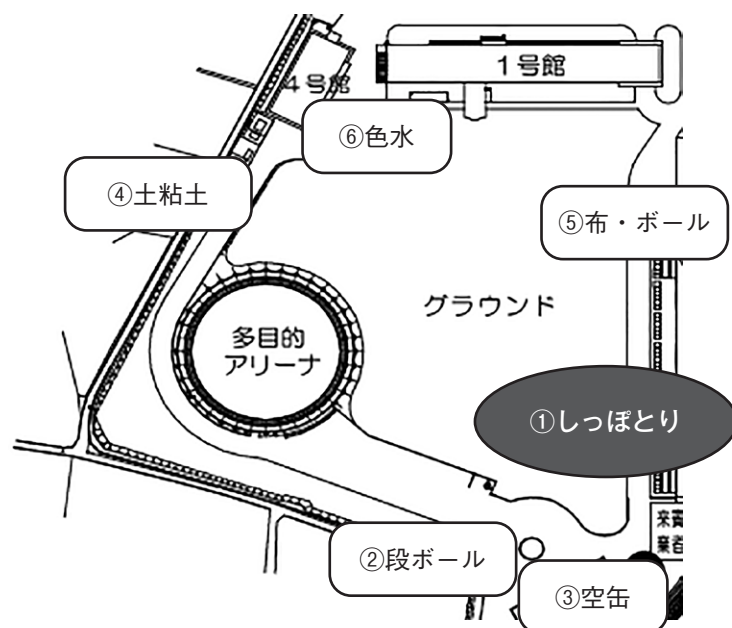


わたしのうち

4-3 ⑥ 第3回交流保育 4歳児クラスとの交流保育

- 1) 日 時 令和5年5月10日(水) 1-2限
- 2) 場 所 長坂キャンパス グラウンド
- 3) 参加者 つるた保育園 4歳児クラス30名(5/10) 引率保育士4名
子ども生活学部 4年「保育内容総合演習Ⅳ」履修者53名
- 4) 主担当 市川、田淵、桂木、小野
- 5) テーマ いろいろな遊びに親しもう
- 6) 活動の展開

時間	子どもの活動	学生の動き	備考
9:10		・出席確認、環境構成	・健康確認
9:30	・来校(グラウンド) ・集まり ・しっぽとり ・水分補給	・子どもと一緒に体操することを通して、子どもが心身ともに解放し安心して活動できるようにする	・子どもは初めての来校 ・事前の観察でとらえた子どもの姿から、自ら関心をもって取り組むことができる保育環境を構想する
10:00	○好きな遊び ・遊びの紹介を受け、やりたい遊びを選んで取り組む ・段ボール ・布、ボール ・空き缶 ・色水・土粘 ※一つの遊びにじっくり取り組む ※複数の遊びを試す ※遊びと遊びを繋げる	・グループごとに環境構成、遊びを提案する ・見守る、励ます、一緒に活動するなど、子どもの実態に即しつつ、子どもが主体的に活動するよう援助する。 ・遊びと遊びが繋がって新しい遊びが生まれることも予想される。子どもなりの楽しみ方を認めながら、環境の再構成をするなど遊びの動線に留意する。	・担任保育士も一緒に活動していただく ・適宜、水分補給、排泄 ・土粘土の様子で身支度時間を調整する
10:45	・片付け ・帰園		



7) 活動の様子



しっぽとり



きれいな布でファッションショー



すりこぎできれいな色



ボールをキャッチ!



土粘土の感触を味わって



段ボールでぼくの基地



ガムテープを切ることに挑戦

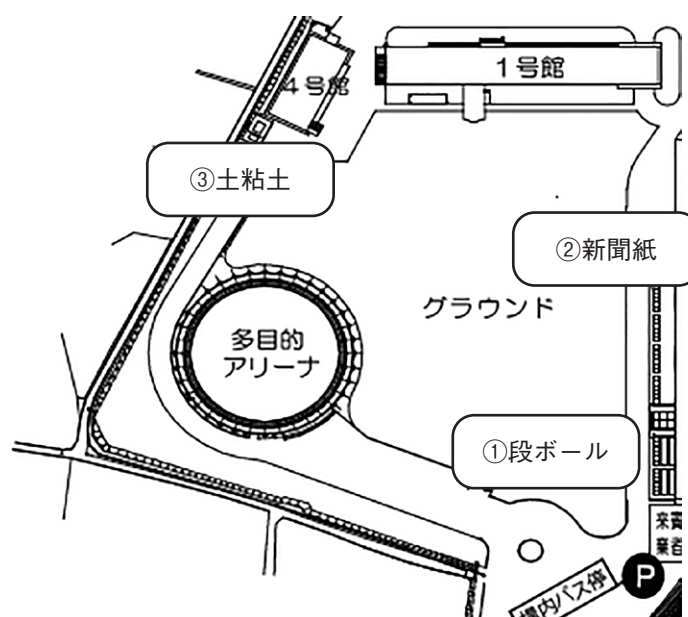


空き缶を積んで、並べて

4-4 ⑦ 第4回交流保育 3歳児クラスとの交流保育

- 1) 日 時 令和5年5月17日(水) 1-2限
- 2) 場 所 長坂キャンパス グラウンド
- 3) 参加者 つるた保育園 3歳児クラス30名(5/17) 引率保育士4名
子ども生活学部 4年「保育内容総合演習Ⅳ」履修者53名
- 4) 主担当 市川、田淵、桂木、小野
- 5) テーマ いろいろな遊びに親しもう
- 6) 活動の展開

時間	子どもの活動	学生の動き	備考
9:10		・出席確認、環境構成	・健康確認
9:30	・来校(グラウンド)	・グラウンドを散策し、環境を知らせることで、初めての場所でも安心して活動できるようにする	・事前の観察でとらえた子どもの姿から、自ら関心をもって取り組むことができる保育環境を構想する
9:45	○遊びの紹介 ・グラウンドを散策し、遊び環境をめぐる	・見守る、励ます、一緒に活動するなど、子どもの実態に即しつつ、子どもが主体的に活動するよう援助する。	・担任保育士も一緒に活動していただく
(10:15)	○好きな遊び ・やりたい遊びを選び、取り組む ① 段ボール ② 新聞紙 ③ 土粘土 ※一つの遊びにじっくり取り組む、複数の遊びを試すなど子どもの姿に応じるようにする ※遊びと遊びを繋げる	・遊びと遊びが繋がって新しい遊びが生まれることも予想される。子どもなりの楽しみ方を認めながら、環境の再構成をするなど遊びの動線に留意する。 ・遊びへの満足感・充実感を得ながら、片付けに気持ちが向けられるようにする	・適宜、水分補給、排泄 ・土粘土の様子で片付け
10:30	・片付け		・身支度時間を調整する
10:45	・水分補給 ・ふりかえり ・バス乗車 ・帰園		



7) 子どもの姿



どこにいるか見つけてね



もっと高くしたい



ちぎったて伸ばして土粘土の感触を楽しむ



洗うって気持ちよい



新聞紙を履いて歩く



ちぎるのもコツが要る

4-5 4年生による教材提案型の交流保育を通して

子どもにとっては園外保育であることから、活動開始直後は緊張した面持ちで環境を探索しており、心身を開放して遊びに取り組むまでに時間を要した。また、子どもの生活に身近なモノを教材として取り上げたが、どのように関わったらよいか戸惑う姿もあった。学生が遊びのモデルとなり、遊び方を提案したり楽しさを伝えたりすることで徐々に自分なりの関わり方で遊び出す姿があった。場を構成するのみならず、子どもと環境とをつなげる人的環境としての保育者の関わりの重要性を再認識した。

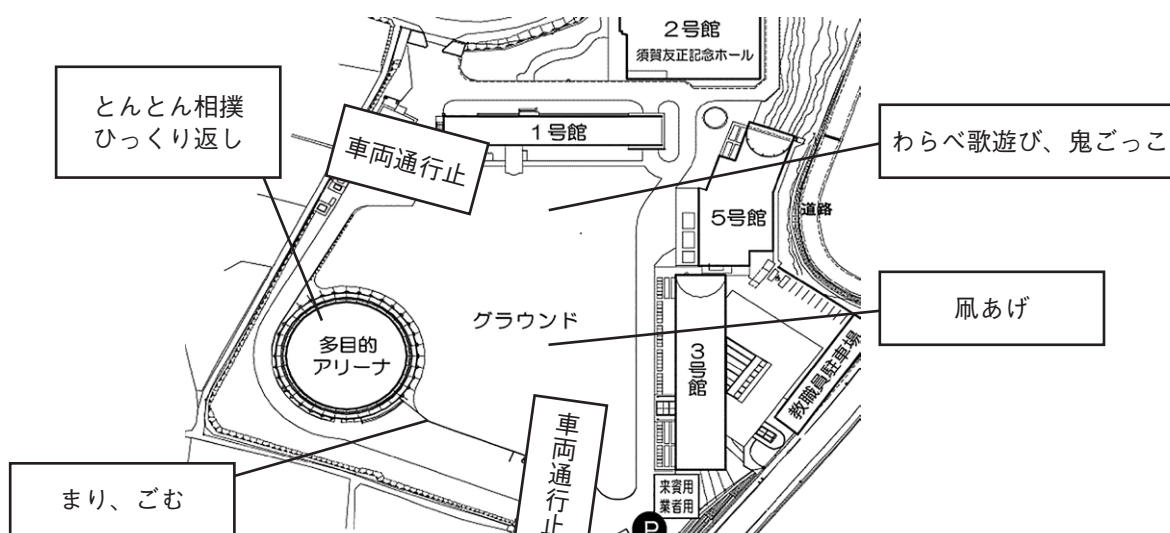
5 3年生による教材提案型の交流保育 — 3園との交流保育 —

1月に教材提案型の交流保育の機会を得た。「保育内容総合演習Ⅲ」を履修する3年生46名が「伝承遊び」をテーマに教材研究し、3園の子どもと交流保育を実践した。

5-1 ⑧ 認定しらゆりこども園との交流

- 1) 日 時 2024年1月10日(水) 1-2限
- 2) 場 所 長坂キャンパス アリーナ、グラウンド(雨天時 アリーナのみ) 3)
- 3) 参加者 認定しらゆりこども園 年中児96名(4クラス)、引率 保育教諭10名
「保育内容総合演習Ⅲ」履修者3年生46名
- 4) 主担当 桂木、市川、月橋、小野
- 5) テーマ 伝承遊びに親しむ
- 6) 活動の流れ

時間	子どもの活動	学生の動き	備考
9:10			・身支度確認
10:00	先発 園出発		・トイレに踏み台
10:20	○先発来校(ゆり ²⁴ 、ひまわり ²³) ・アリーナ前駐車場に到着 ・挨拶 ・遊びの紹介をみる ・やりたい遊びをする 凧/こま わらべ歌/鬼ごっこ まり/ゴム、 とんとん相撲/ひっくりかえし	・学生集合、出席確認 活動の留意事項の確認、環境整備 ・挨拶 ・遊びの紹介をする ・それぞれの遊びの場で援助する ▶子どもの「やってみたい」意欲を大切にかかわる ▶一緒に体を動かす、声や調子を合わせたなど、楽しい雰囲気づくりを心掛ける。 ▶一人一人の子どもの取り組みを見守る、認める、励ます、モデルになる等さまざまなかわりを試みながら、その子どもなりの挑戦を支える	・森の入口に消毒設置 ・安全には十分に留意し、体調不良やケガ等は必ず保育者に報告する ・子どもの様子に留意し、適宜水分補給する ・お手洗いにきたい子どもは保育教諭に必ず報告。
11:10	○後発来校(こすもす ²⁴ 、すみれ ²⁵) ・アリーナ前駐車場に到着 ・遊びの紹介をみる ・やりたい遊びのコーナーで遊ぶ		
11:20	○先発クラス帰園		
12:00	○後発クラス帰園		



7) 活動の様子

認定しらゆりこども園の子どもたちは今年度3回目の来校であったが、はじめての「子どもの森」以外での活動であったためか、子どもたちは緊張の面持ちであった。4つの遊びの環境から好きな遊びを1つ選びじっくり遊びこむ子ども、全ての遊びを試したい子どもなど参加の仕方はさまざまだった。連凧、とんとん相撲、ごむ跳び、ひっくり返しなど、初めて出会う遊びもあったようで、子どもたちにとっては新たな挑戦の機会となった。

学生たちは、自分たち自身が遊ぶ姿を示すことで、子どものやってみよう意欲や興味を引き出したり、遊び方を知らせたりするなど「環境を通して」保育を展開するよう試みた。



連凧あがった！



こま回しに挑戦！



はないちもんめ



ごむをくぐって・跳んで



とんとん相撲



ひっくり返しゲーム

5-2 ⑨ 認定みどりこども園との交流

- 1) 日 時 2024年1月17日(水) 3-4限
- 2) 場 所 認定みどりこども園
- 3) 参加者 認定みどりこども園 年少、年中、年長児1号、2号認定の幼児
「保育内容総合演習Ⅲ」履修者子ども生活学部3年生 15名
- 4) 引 率 桂木、市川
- 5) テーマ 伝承遊びに親しむ
- 6) 活動の流れ

時間	子どもの活動	学生の動き	備考
12:30		・学生集合、出席確認 活動の留意事項の確認、環境構成	・身支度確認 ・トイレに踏み台
13:00	・遊びの紹介をみる ・やりたい遊びをする 凧／びゅんびゅんこま わらべ歌／鬼ごっこ ゴム、 とんとん相撲／ひっくりかえし	・遊びの紹介をする ・それぞれの遊びの場で援助する ▶子どもの「やってみたい」意欲を大切にかかわる ▶一緒に体を動かす、声や調子を合わせたなど、楽しい雰囲気づくりを心掛ける。 ▶一人一人の子どもの取り組みを見守る、認める、励ます、モデルになる等さまざまなかわりを試みながら、その子どもなりの挑戦を支える	・森の入口に消毒設置 ・安全には十分に留意し、体調不良やケガ等は必ず保育者に報告する ・子どもの様子に留意し、適宜水分補給する ・お手洗いにいきたい子どもは保育教諭に必ず報告。
14:15	(1号認定児降園)		
15:00	(おやつ)		
16:00	片付け	・終わりの時間の見通しを伝え、片付け	
16:30	・挨拶、交流保育終了	・挨拶、片付け	

7) 活動の様子

認定みどりこども園では、1号認定の子どもの降園前の13時から、1号認定の子どもの降園後の14:15過ぎから、2号認定の子どものおやつ終了後の15:30過ぎから、と3回に分けて活動させていただいた。各回通して同じ遊びに取り組む子ども、異なる遊びを試す子どもなど様々であった。そのため、学生はその都度子どもに応じて保育環境の再構成をし、保育の反省-改善を繰り返すことが可能となった。午後の短時間の活動であったが、子どもの実態に応じて保育を改善する経験を得ることができた。



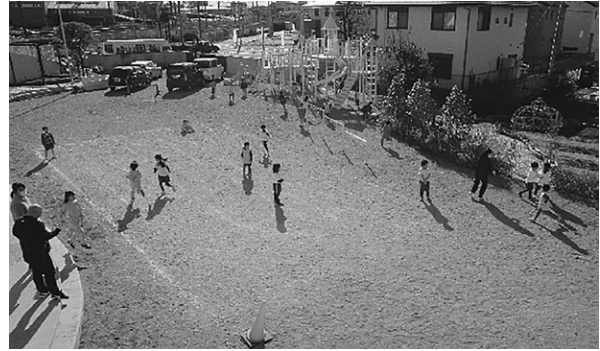
自分の凧づくり



とんとん相撲で勝負!



いろいろな技を試して



思い切り走って鬼ごっこ

5-3 ⑩ 認定こども園釜井台幼稚園との交流

- 1) 日 時 2024年1月17日(水) 3-4限
- 2) 場 所 認定こども園釜井台幼稚園
- 3) 参加者 2号認定の年少児、年中児、年長児
「保育内容総合演習Ⅲ」履修者子ども生活学部3年生 16名
- 4) 引 率 小野、杉本、田淵
- 5) テーマ 伝承遊びに親しむ
- 6) 活動の流れ

時間	子どもの活動	学生の動き	備考
14:30		<ul style="list-style-type: none"> ・園に学生集合、出席確認、職員室に挨拶 ・園環境の確認 ・環境構成、教材準備 ※ 環境構成に際しては、園の先生に場所等ご教示いただく 	<ul style="list-style-type: none"> ・身支度確認 ・健康確認
15:30	<ul style="list-style-type: none"> ・集まり ・挨拶 ・遊びの紹介をみる ・やりたい遊びをする 凧/こま わらべ歌/鬼ごっこ まり/ゴム、 とんとん相撲/ひっくりかえし 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもと対面、挨拶 ・遊びの紹介をする ・それぞれの遊びの場で援助する ▶子どもの「やってみよう」意欲を大切にかかわる ▶一緒に体を動かす、声や調子を合わせるなど、よい雰囲気づくりを心掛ける。 ▶一人一人の子どもの取り組みを見守る、認める、励ます、モデルになる等さまざまなかわりを試みながら、その子どもなりの挑戦を支える 	<ul style="list-style-type: none"> ・安全には十分に留意し、体調不良やケガ等は必ず保育者に報告する ・子どもの様子に留意し、適宜水分補給する
16:30	<ul style="list-style-type: none"> ・順次降園 	<ul style="list-style-type: none"> ・片付け、挨拶 ・解散、帰宅 	

7) 活動の様子

預かり保育の時間帯に実践させていただいた。年少児の参加が中心で、学生の提案する環境に興味をもって挑戦しようとする姿があった。1つの遊びに子どもが集中する傾向があり、担当する学生の援助が追いつかない状況も生じた。他の遊び担当の学生と連携しあい、補助に入ったり遊びの動線を整えたりするなどして、その都度の子どもの状況に応じて柔軟に保育に臨んだ。

5-4 ⑪ 風と緑の認定こども園との交流

- 1) 日 時 2024年1月17日(水) 3-4限
- 2) 場 所 風と緑の認定こども園
- 3) 参加者 年少児、年中児、年長児の2号認定の子ども
「保育内容総合演習Ⅲ」履修者子ども生活学部3年生 15名
- 4) 引 率 小野、杉本、田淵
- 5) テーマ 伝承遊びに親しむ
- 6) 活動の流れ

時間	子どもの活動	学生の動き	備考
14:30		<ul style="list-style-type: none"> ・園に学生集合、出席確認、職員室に挨拶 ・園環境の確認 ・環境構成、教材準備(環境構成に際しては、園の先生に場所等ご教示いただく) 	<ul style="list-style-type: none"> ・身支度確認 ・健康確認
15:30	<ul style="list-style-type: none"> ・集まり ・挨拶 ・遊びの紹介をみる ・やりたい遊びをする 凧/こま わらべ歌/鬼ごっこ まり/ゴム、 とんとん相撲/ひっくりかえし 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもと対面、挨拶 ・遊びの紹介をする ・それぞれの遊びの場で援助する ▶子どもの「やってみたい」意欲を大切にかかわる ▶一緒に体を動かす、声や調子を合わせるなど、よい雰囲気づくりを心掛ける。 ▶一人一人の子どもの取り組みを見守る、認める、励ます、モデルになる等さまざまなかわりを試みながら、その子どもなりの挑戦を支える 	<ul style="list-style-type: none"> ・安全には十分に留意し、体調不良やケガ等は必ず保育者に報告する ・子どもの様子に留意し、適宜水分補給する
16:30	<ul style="list-style-type: none"> ・順次降園 	<ul style="list-style-type: none"> ・片付け、挨拶 ・解散、帰宅 	

7) 活動の様子

預かり保育の時間帯に実践させていただいた。それぞれの遊びについて活動の場を設けていただき、学生はそれぞれの場所で環境を構成させていただいた。遊びの紹介を受けた後、子どもがやりたい遊びを選ぶと一か所でじっくり遊びこむことできた。はじめは、学生が紹介した遊び方を試みていた子どもたちだが、徐々に自分なりのやり方や挑戦をする子どもの姿が見られるようになると、学生の援助も子どものやりたい姿に寄り添う、子どもの活動の動線を整える、環境の再構成をする、といった役割へと調整していった。



ゴムでくもの巣くぐり



とんとん相撲で対決



糸を巻くことに集中—こま—



ひっくり返し

5-5 3年生による教材提案型の交流保育を通して

3年生による教材提案型の交流保育は4回実施した。うち、1回は園に来校いただき、3回は学生が園を訪問する形で実施した。今回はじめて訪問型で実践させていただき、子どもが慣れ親しんでいる園で活動させていただくことで、子どもが生活の段差を大きく感じることなく自己発揮できるという利点があった。一方、授業時数の関係から、子ども理解および訪問園の理解のための時間を十分に確保できなかったことが課題として残った。一般的な時期の発達の姿を想定して教材研究を進めているが、出会う子どもと連携する園の保育の理解を土台に保育を構想する必要がある。今後の課題として、より適切な連携の在り方を検討していきたい。

6 おわりに

今年度は、従来実践している「子どもの森」を活かした来校型の交流保育に加え、学生の教材提案型の交流保育を試みた。学生自身が教材研究、保育を計画—実践させていただくこの試みはなかなか得難い貴重な機会である。

学生にとっては「子どもの姿に寄り添う」のみならず、保育環境を構成し、実践する難しさを伴う活動ではあるが、クラスの友達や大学の教員と共に相談し力を合わせながら保育を実践できる機会を得ることの意義は大きい。一方、上述したように、子どもの理解および園の保育の理解を進める機会や時間を十分に確保できなかったことが大きな課題である。

今年度の反省を、次年度以降の計画に生かし、より適切な連携の在り方を検討していきたい。

謝辞

交流保育にご協力くださいました、認定みどりこども園、認定しらゆりこども園、つるた保育園、認定こども園釜井台幼稚園、風と緑の認定こども園のみなさまに深く感謝申し上げます。

Ⅲ. T i n y（障がいのある子どもと家族の支援）実践報告

子ども生活学部 専任講師 大 島 美知恵

1. はじめに

T i n yの活動は今年で12年目を迎えた。2020年からコロナ感染拡大の影響で対面での活動が制限される中、SNS発信、オンラインコンサートと非対面での活動を継続し、昨年度からは「ふれあいT i n y隊」と称し、参加者を限定した方法でのあそびの集い、そして風通しの良い大きな体育館をお借りしてのT i n yファミリーコンサートの開催など、コロナ対策をしながらどうか対面の活動を実現することができた。更に今年度は本学のホールでのT i n yファミリーコンサート、そして参加者を限定せず一般に参加者を募集する「あそびの集い」を復活することができた。まだ「あそびの集い」開催回数の縮小、おやつタイムの自粛などが残っているが、これにより、活動方法はほぼコロナ前に戻ったことになる。よって今年は「復活の年」とも言えるが、学生たちの中で、このホールでのコンサートや遊びの集いの経験者はゼロ、そして教員の側も長年に渡りT i n y代表として活動を支えてきた土沢先生が昨年度末に退職され、手探り状態での再開となった。以前の記憶をたどりつつ、新たに現在活動中の学生、教員の意見を織り交ぜながら新しいT i n y隊として前進した年でもあったと言える。

またT i n yの絆は深く、4年前に卒業した経験豊富な先輩や土沢先生も応援にかけつけてくださり、多くのサポートを頂きながら2023年度の活動を終えることができた。

各々の活動について報告していきたい。

2. 「ふれあいT i n y隊」と「あそびの集い」

(1) 第3回「ふれあいT i n y隊」の実践

7月は新型コロナウイルス感染症法上の位置づけが5類に移行されてから、まだ2か月ということもあり、感染対策に気を抜けない時期と判断し、昨年度と同様に近隣自治体のこども発達支援センターと協力し、特定の参加者に限定した「ふれあいT i n y隊」の活動を行った。

●活動の概略

1. 日 時：7月8日（土）13時00分～15時00分
2. 場 所：宇都宮共和大学5号館4階 保育実習室
3. 内 容：パネルシアター、制作活動、楽器活動、身体活動、音楽鑑賞等を通しての交流
4. 参 加 者：A施設利用児童（幼少期から学童期）7名、引率施設職員：5名、保護者5名
計17名
5. 参加学生：子ども生活学部4年生5名、3年生3名、2年生5名、1年生5名
宇都宮短大音楽科2年生1名、1年生1名 計20名

●実施までの準備

「ふれあいT i n y隊」は今回で3回目となることから、学生が主体となり、プログラムの各活動（身体活動・パネルシアター・手遊びなど）の担当者を決めて具体的な内容を相談するようにした。また学生発案の新しい試みとして「コーナー遊び」を取り入れた。遊びのコーナー（輪投げ・ヨーヨー釣り・金魚すくいなど）を用意し、子ども達が好きな遊びを選んで自由に回る方

法である。過去2回は全員で行う集団遊びが多かった為、子どもの人数に対して学生の人数が多く、子どもと関われる学生が限られてしまうことが課題となっていた。このコーナー遊びなら、子どもが分散して時間をかけて順番にコーナーを回ることから、全ての学生が子どもとの関わりをもつことができるという発想であった。また子どもにとっても遊びを自ら選択できるメリットがあると考えた。

学生たちは各プログラムとコーナー遊びと2つの準備を進めなければならなくなり、多くの時間と労力が必要となったが、学生同士で協力しながら当日までに用意することができた。今年度最初の活動であったことから1年生は各グループに分散して配属し、先輩たちのアドバイスを受けながら活動できるように配慮されていた。

●当日の活動の様子

これまでと同様に活動開始前には、職員から子どもたちの特性や対応についての情報提供を行ってもらい、ある程度の共通理解をもって活動に臨んだ。

学生は午前中から集まって準備を整え、協力し合い状況に応じた動きで活動を盛り上げていた。参加した子どもたちも、最初は慣れない場所に緊張気味だったが、周りの雰囲気や安心できる関わりの中で楽しんでくれている様子であった。また初参加の1年生も緊張してなかなか子ども達に話しかけられなかったが、子ども達の笑顔を見て緊張がほぐれ、先輩や職員さんの対応を見て接し方を学ぶことができていた様子であった。

初の試みであったコーナー遊びは、どこか一つのコーナーに子どもが固まってしまうことを懸念していたが、子どもたちの興味は様々で私たちの心配をよそにまんべんなく子どもたちが遊びを選んで開始された。いくつかのコーナーを回りつつも好きなコーナーには何度も訪れたり、自分たちのペースで楽しむことができていた。

そして活動の終了時には子ども達からT i n y 隊メンバーへ感謝の言葉と贈り物があり、交流を深めた。

また今回は職員が活動中は子どもたちに付き添えるという施設ならではの状況を活かし、別室で保護者相談も行った。今年度から客員研究員となった土沢先生が相談員となり、子どもを支える保護者の日常生活の中での悩みを受け止める時間を設けた。

表1. 第3回ふれあいT i n y 隊の活動プロトコル

項目・目的	使用曲	楽器・教具	内容
1. 挨拶の歌 始まりの認識	手をつないで こんにちは	タンブリン	始まりの認識 一人ずつ呼称し、タンブリンを鳴らしてもらう
2. 楽器活動 手の操作性 遅速を感じる 子ども同士の コミュニケーション	こいぬのマーチ うみ	水入りペットマ ラカス オーシャンドラム	1. 自由に鳴らしてもらう 2. こいぬのマーチに合わせて鳴らす 3. 速さを変えて鳴らす 4. オーシャンドラムをうみに合わせて鳴らす (2人ずつ前に出てきて椅子に座って鳴らす)
3. 身体活動 発散	ドラえもん音頭		音源に合わせて踊る
4. コーナー遊び 自己表現 子ども達と学生の コミュニケーション		各コーナーの準備 物	各コーナーを子どもたちが選らんで遊ぶ。

5. 視覚教材の活動 ペブサート 注視	誰かがくるよ	シルエットペブサート (海の生き物Ver)	♪誰かがくるよの曲にあわせてペブサートを動かして子ども達と関わりをもつ。
6. 鑑賞 鎮静・集中力	ディズニー メドレー	ピアノ	リトルマーメイドメドレー 皆で演奏を視聴する。
7. 視覚活動 メガホン人形	ドレミの歌	メガホン人形	メガホン人形のダンスを皆で視聴する。 子ども達が注目しやすい動きを心掛ける。
8. 歌唱 一体感	ビリーブ	ピアノ	全員で歌う
9. 終わりの歌 終わりの認識	さよならの歌	ピアノ	終わりの認識 鳴らしたエネルギーチャイムの音を指でとめてもらう



写真1. 初の試みのコーナー遊び



写真2. 子ども達からのお礼の言葉



写真3. みんな集まれ！集合写真

(2) 第49回「あそびの集い」の実践

「あそびの集い」は2020年2月2日から実に4年ぶりの開催となった。普段から接している職員や仲間と共に約束された時間に訪れてきて活動始める「ふれあいT i n y 隊」とは違って、子どもたちは受付開始9：30から10：00までの間に各家族の都合に合わせてばらばらにやってくる。よって駐車場係や会場までの案内係、開始を待つ間に子どもと関わる係など、「ふれあいT i n y 隊」では必要のなかった役割が幾つもある。また子どもたちの行動も、集団生活を過ごしている施設職員に連れられてくる場合と自由に過ごしている家庭の保護者と共に来るのとは大きな違いがある。後者の方が自由度が増し、活動の指示通りには動けない子どもが多くなる。しかし、ここにT i n yの「安心して遊べる場の提供」の意味が活きてくる。それを学生たちが経験を通して感じてもらえる場となったと思われる。

●活動の概略

1. 日 時：3月2日（土）10時00分～11時45分
2. 場 所：宇都宮共和大学5号館4階 保育実習室
3. 内 容：パネルシアター、制作活動、楽器活動、身体活動、音楽鑑賞等を通しての交流
4. 参 加 者：地域に在住する障がいのある乳幼児・児童とその家族
(子ども12名 保護者8名 計20名)
5. 参加学生：子ども生活学部4年生1名、3年生3名、2年生6名、1年生4名
宇都宮短大音楽科2年生1名、1年生1名 計16名

●実施までの準備

学生たちは春休み中で、しかも2年生は実習明けということもあり、全体の打ち合わせが2月29日の1日のみとなったが、各活動のグループメンバー間で連絡を取り合い、教材の制作、進行の役割分担等の打合せ、練習をして全体ミーティングに臨んでくれた。29日の全体ミーティングではこれまでの「ふれあいTiny隊」の活動との違いを伝えると共に、「あそびの集い」ならではの新たな役割についても説明を行った。全体的な流れを全員で確認し、意見を出し合いながらプログラムの順番を変更したり、教材の作り直しを行った。会場のセッティングも春休みで授業がないことから可能なところまでは進めておくようにした。ミーティング終了後も自主的に残って準備や練習をしている学生の姿も見られた。

参加受付の状況としては10日前くらいまでは3組の申込しかなく4年間の隔たりを感じたが、その後、学生たちがボランティア先のご家族に声をかけたり、1週間前に本学関連の親子リトミックワークショップがミナテラスとちぎで開催され、そこからの参加もあり、当日は親子合わせて20名の参加となった。

●当日の活動の様子

既述のように全体打ち合わせの時間が少なかったうえに学生全員が「あそびの集い」は未経験ということで心配もあったが、学生たちもそこを感じ取っていたのか、集合時間よりも早い時間から集まって作業をしており、また卒業生が参加し、フォローしてくれた部分も多々あり、会場準備、リハーサルを終え、各担当箇所にスタンバイした。

親子が到着すると学生たちは笑顔で迎え入れ、各担当ごとの対応を積極的に行っていた。「あそびの集い」ならではの開始を待つ間の子もたちとの関わりも、今回は会話のできる子どもたちも多く、あちらこちらで笑い声が聞こえ、楽しく行っていた。

活動が始まると「ふれあいTiny隊」のように一つの集団での参加とは異なり、各々の親子が自分たちのペースで参加するので、声をかけてもふらふらと歩いたり子どもの反応は様々である。親子が「安心して過ごせる場」の提供を念頭に一人ひとりの反応を受け止めつつ、安全管理に必要な部分ではサポートすることを伝えていたこともあり、学生たちは、着席しない子どもを制止したりすることなく温かく見守りつつ、タイミングを見て声をかけるという対応がなされていた。

保護者アンケートではほとんどの方がとても良かったとの回答を下さり、中には4年ぶりに参加した親子もあり、ご自身の所属する団体と一緒に活動することはできないかとの依頼もあった。また多動傾向のあるお子さんの母親からいつもイベントに出かけると着席しての参加が難しく、制止するよう求められ不安を抱えて参加していたが、ここでは皆さんあたたかく見守ってくれる

のでまた参加したい。との声もあった。

終了後のミーティングでは聴覚過敏を抱える障がい児も多いことからCD、ピアノの使用場面についてどちらが良かったのか、年齢的には高くても発達段階としては口唇期にある子ども達への配慮から掃除は行き届いていたか、子どもの気になった行動に対する対応についてどうすれば良かったのか、活動を進行していくときの声のトーンや言葉の使い方、などについて話し合いが行われた。どの課題も正解というものではなく、目の前にいる子どもたちの様子から判断していくことになるが、「子どもの気持ちに寄り添いつつも伝えたいことを自然に、子どもの興味を失わないように話しかけることを学べた」との意見があり、子ども達との関わりについて学びを深めていることを実感できた。

表2. 第49回あそびの集いの活動プロトコル

項目・目的	使用曲	楽器	活動内容
1. 始まりの認識 活動、場面の切り替え *アセスメント	手をつないでこんにちは	タンブリン	歌いながら対象者一人ひとりの名前を呼びかけ、タンブリンを介した反応を促す
2. 楽器活動 ・コミュニケーション ・表現	世界中の子どもたちが	洗濯ビーズ ギャザリング ドラム	音を鳴らす 歌に合わせて鳴らす。 提示や模倣をし、親子で一緒に鳴らす。 前に出たい子を募り、2名が前でギャザリングドラムを鳴らす⇒交代する。 音楽をGo Stopする。
3. 身体活動 固有感覚への刺激 親子のコミュニケーション	バスごっこ		保護者の膝上に子どもを乗せて、動かす。
4. 手遊び 手の操作性	・トントントンひげじいさん ・アンパンマンのアレンジ		学生のモデリングを見ながら、皆で手遊びを行う。
5. 視覚活動 注視	うれしいひなまつり		パネルシアター 「ひなまつりケーキを作ろう」
6. 製作 学生と子どもとのコミュニケーション		紙皿・リボン	テーマ「ひなまつり」 顔を書いてもらい台紙に貼る
7. 視覚活動 ・注視	誰かが来たよ		ペプサート シルエットになっているペプサートを曲に合わせて出す。 てんとう虫 はち 蝶々
8. 鑑賞 ・集中 ・共感	おおきな古時計	トーンチャイム	トーンチャイムの演奏 担当：子ども生活学部
9. 鑑賞 ・集中 ・共感	リメンバーミー	ピアノ（歌）	歌を皆で聴く
10. 鑑賞 ・集中 ・共感	リトルマーメイドメドレー	ピアノ	連弾の演奏を皆で聞く
11. 歌唱 ・一体感	ありがとうの花	ピアノ	一緒に歌う
12. 終わりの歌 終わりの認識	さよなら	エナジーチャイム	一人ひとり、エナジーチャイムの音を指先で押さえ、消してもらう



写真4. パネルシアター



写真5. 手遊び



写真6. 楽器あそび



写真7. 身体活動



写真8. 制作活動

3. Tinyファミリーコンサート

～障がいがあってもなくても子どもからおとなまでみんなが楽しい音楽のつどい～

Tinyファミリーコンサートは本年度、第11回を迎え、4年ぶりに本学にある須賀友正記念ホールでの実施となった。

(1) 開催までの道のり

昨年度は記念すべき第10回を迎え、3年振りに集合参加型の対面実施のスタイルで開催することができた。しかし、まだまだコロナ禍で様々な配慮が必要な時期で、冷暖房完備の換気のできる大きな会場を探し、宇都宮市サンアビリティーズ体育館を借りてのコンサートとなった。サン

アビリティーズは障がいのある人の教養・文化および体育の向上を図り、社会参加を促進するための施設であるため、障がいのある方が利用しやすい設備が整っており、参加者の出入りなどはスムーズで運営しやすい場所であった。ただ電子楽器などの反響板を使用せずとも楽しめる楽器のコンサートには向いているが、ピアノや弦楽器などの音響を考えるとやはりホールでのコンサートが求められる。今年度は新型コロナウイルス感染症法上の位置づけが5類に移行されたことを受け、感染状況には十分に注視しつつ、ホールでの開催に踏み切った。出演者の依頼については演奏の技量だけではなく、障がいのある方々への理解があり、それに応じたプログラムを考案しただけの方で、なおかつ期日、費用等ある程度のこちらの要望に応じていただける方ということで難航していたが、「0歳からのコンサート」を各地で開催されているローズベルミュージックの嘉山さん、竹山さんをご紹介いただくご縁があり、お願いすることとなった。ローズベルミュージックのコンサートでは「曲の途中で聞こえてくる赤ちゃんの泣き声も音楽の一つと捉えておりますので皆様もご理解ください」とのナレーションで演奏がスタートされている。観客と出演者の隔たりのないコンサートを普段から開催されていることから、まさにTinyファミリーコンサートにふさわしい演奏者をお迎えすることができた。

大学祭の1週間前ということで学生たちも忙しい時期であったが、演奏者やプログラムが決まったところで、チラシの作成、プログラムの作成をイラストやパソコン作業の得意な学生たちが協力してくれた。当日の役割分担、準備物などはミーティングで打ち合わせを行った。また前回、大好評であったドラムサークルも行うことになり、舞台上での進行をするメンバーを決めて練習を行った。使用するドラムについては全員で打面のガムテープの張替を行い、当日に参加できない学生も協力した。更に当日スタッフの人数が足りないことから親子遊びの会のメンバーに駐車場や案内の係の協力をお願いした。

(2) コンサート当日の様子

●催しの概略

1. 日 時：2023年11月4日（土）13時30分～15時00分
2. 場 所：宇都宮共和大学長坂キャンパス 須賀友正記念ホール
3. 内 容：ピアノ連弾やソロを中心に誰もが知っている名曲を演奏していただく。
参加者と共に一緒に踊る、楽器を演奏するなど参加型のコーナーや、学生のドラムサークルとの共演も行う。
4. 参加者：障がいの有無にかかわらず乳児から高齢者までどなたでも（一般参加者は82名）
5. ボランティアスタッフ（Tiny隊および卒業生）：
子ども生活学部：4年生5名、3年生3名、2年生3名、1年生 2名、卒業生3名、親子あそびの会から5名
短大音楽科：1年生1名

計22名



図1. 第11回Tinyファミリーコンサートのポスター

●当日の活動の様子

学生たちは朝早くから集まり、会場の清掃、使用機器の確認、司会のリハーサルなど、開始に向けて準備を行った。ホールでのコンサートも既に経験者は卒業してしまっている為、役割や仕事の内容が学生たちにしっかりと伝わっているか懸念されたが、ここも卒業生のサポートを得ることができた。特に身障者用駐車場の取り仕切りは難しい部分があったが、卒業生の指示を受けながら学生たちも率先して対応してくれていた。またドラムサークルのメンバーは演奏者とのリハーサルを行い、少しでも参加の方々に楽しんで頂けるよう工夫を凝らしていた。

当日は、乳児から高齢者まで幅広い年齢層の方々、また、自力で動くことが難しい方、自閉症やダウン症の方なども含め多様な方々が参加していた。その来場者の幅広い年齢層に応え、馴染みのある曲をローズベルミュージックのお二人がピアノ連弾という華やかなアレンジで素晴らしい演奏を披露して下さった。また演奏だけではなく、ホールの大きなスクリーンに美しく、時には可愛く、音楽に合った映像が映し出され、魅了される演奏会となった。障がいのある子どもたちは視覚的な刺激に注目しやすい傾向もあることから、多感覚に働きかける演奏形態は有難かった。

また昨年度に引き続き、休憩前の合間には数名の学生たちが音頭を取り、参加者の皆様と共に手作り太鼓や様々な小物楽器を演奏するドラムサークルを行い、参加者は思い思いに音を鳴らしたり、ポーズを取ったりして大いに盛り上がった。ここで多くの学生たちが太鼓や楽器の配付と回収を行ったが、それが参加者と触れ合う機会にもなり、様々な学びを得ていたことが伺える。

そしてT i n yファミリーコンサートでは医療的ケアを必要とする重症障害児・者を支援する施設「うりずん」の皆様が舞台上で鑑賞して下さるのが恒例となっており、今回も4年ぶりにご参加頂き、和気あいあいとした雰囲気が漂った。



写真9. 第11回T i n yファミリーコンサートの会場の様子

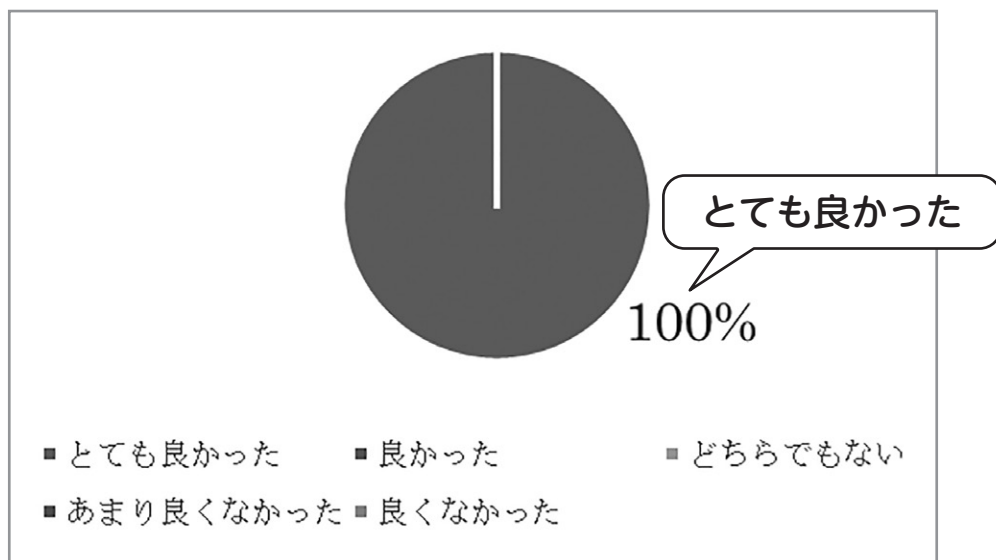


写真10. 出演者を囲んで、Tinyスタッフ&Tiny隊メンバーと共に

(3) 参加者対象の事後アンケート結果

コンサート終了後に参加者アンケートを実施した。これまでは紙面でのアンケートをお願いし、その場で受け取るようにしていたが、今回からは 구글フォームと紙面のどちらか選んで回答できるようにした。しかし 구글フォームで後から回答できるようにしたことで、結果的には回収率はかなり下がってしまった。しかし意見を寄せてくださった方からは満足度の高い意見が寄せられ、今後の開催を期待する声も多かった。以下にその内容を示す。

- 1). 第11回『Tinyファミリーコンサート～障がいがあってもなくても子どももおとなもみんなが楽しい音楽のつどい～』に参加した感想をお聞かせください。(13件の回答)



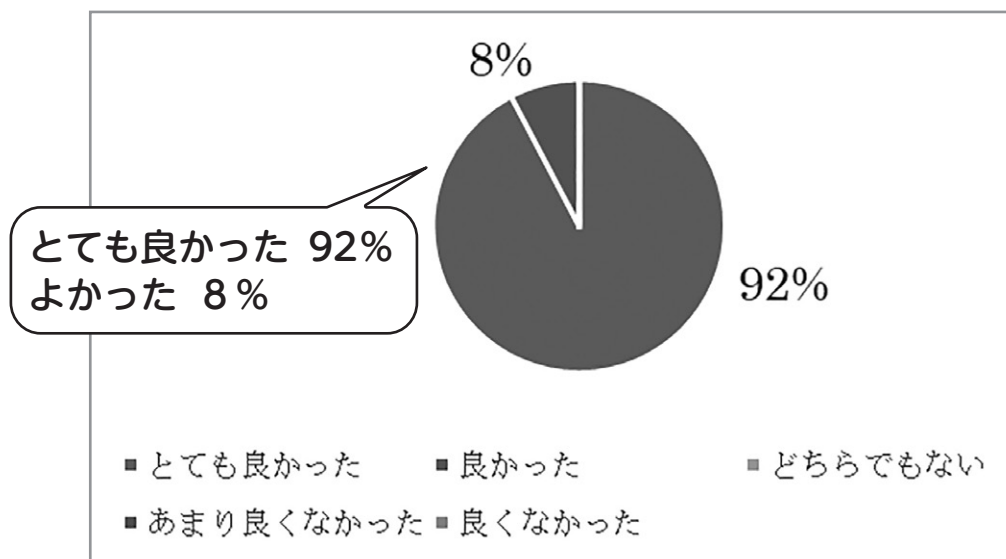
理由・感想など (自由記述) 12件の回答

- ・知っている曲も知らない曲もアップテンポだったり、映像があり楽しめた。
- ・毎年楽しみにしております。障害のある家族と一緒に楽しめるコンサートバス少ないので、大変嬉しいです。
- ・障がいがあっても安心して参加できるコンサート等が無かったので、今回のコンサートを教え

てもらって参加できて、とても楽しかったです。娘も興味を持って見る時もあり、また実際に楽器に触れて一緒に参加できるのは、飽きずにいられて良かったです。

- ・障害があつて騒ぐ娘も参加出来るコンサートだった
- ・演奏も素晴らしかったですし、知っている曲で構成されていたので楽しく聴けました。タイニー隊の方の対応も丁寧でとても良かったです。
- ・演奏がとても素敵でした。みんなが楽しめる内容でとても良かったです。
- ・みんなで楽しめる曲で良かったです。
- ・知っている曲が多く、会場参加型でとても楽しかったです。
- ・和やかな雰囲気できれいに楽しめた。親しみやすい曲であったが、演奏者のテクニックが素晴らしいと感じられた。
- ・子どももとても好きな曲ばかりで最後まで楽しかったです。
- ・知っている曲も多く、楽しめました。生演奏は良いものです。
- ・聞きやすい曲ばかりで、とても楽しかったです。

2). 本日のスタッフやボランティア等の対応はいかがでしたか (13件の回答)



3). その他、ご意見・ご感想などを、自由にお書きください (自由記述) 5件の回答

- ・前に座っていた車椅子の方がトイレや何かで移動する際にステージの階段につかえて移動しにくそうだった。もう少し参加型の曲があると嬉しい。
- ・生徒さんはじめみなさんととても親切で、ありがたく存じます。
- ・今後も、障がいがあつても参加が可能なイベントをたくさん企画してほしいです。とても良かったです。
- ・笑顔での挨拶や対応、とても気持ちがよかったです。
- ・このような素晴らしい企画をどうもありがとうございました。

4. その他のT i n yとしての活動

(1) 長坂キャンパスの大学祭(彩音祭)でのワークショップと展示活動

11月11日(土)～12日(日)にかけて実施された大学祭では、ワークショップと展示、体験コーナーを行った。

展示では、これまでのT i n yの活動、音楽療法のボランティア活動や研究発表の内容が展示された。また体験コーナーとして音楽療法で使用される楽器に触れていただいたり、「ふれあいT i n y隊」で行ったコーナー遊びを再現し自由に遊んでもらったりした。その他、学生がシフトを組んで交代で子ども達に教えながら、手作り楽器やショッピングバックを制作するコーナーも設けた。家族で会話をしながら、それぞれの個性を活かした制作物が仕上がっていた。学生たちも子どもへの説明の仕方を先輩から学んでいる様子が見受けられた。

例年行ってきた音楽ワークショップは、音楽科の学生を中心にパネルシアターや楽器活動、歌唱など、その場に集まった家族が楽しめる内容で行った。ワークショップに参加者が集まるまでの間、子ども生活学部の学生たちが「大きなかぶ」の寸劇をして待ち時間を楽しませてくれた。

珍しい楽器を鳴らしたり、パネルシアターでの掛け合いに答えたり、参加型のワークショップを楽しまれている様子だった。



写真11. 彩音祭での音楽ワークショップの一場面



写真12. T i n y 活動展示

5. まとめに変えて

今年度は3年に渡って続いた新型コロナウイルスへの対策がようやく転換期を迎え、コロナ以前の方法に様々なものが戻りつつある。しかし今年度の活動を振り返ってみて感じたことは、方法が「以前に戻る」ということはあっても、その中身は「戻る」ということはあり得ないのだということである。やはり環境やそこに関わる人も変わっていくもので、現在と過去の方法や考えを吟味しながら、より良いものを考えていく必要がある。

コロナ対策によって「ふれあいT i n y隊」という開催方法が誕生し、今年度は「あそびの集い」が復活した。しかし、この2つの開催方法にもそれぞれのメリット・デメリットがある。復活した「あそびの集い」をこれまでの経験を活かしてさらに充実させていくことを試みていきたい。よって来年度は「あそびの集い」に施設の参加も可として幅広く案内をして行う予定である。またファミリーコンサートもサン・アビリティーという会場と本学ホールという2つの選択肢を経験した。それぞれのメリットを活かし、状況に応じて開催方法を選択していきたい。障がいのあ

る方も楽しめる数少ないコンサートの一つとして、多くの方が待ち望んでいるものであることをコロナ禍で感じる事ができた。今後も充実した内容となるよう試みていきたい。

そしてまた、来年度もT i n yは転換期を迎える。5年間、共にT i n yの活動を行ってきてくれた星先生が顧問を退任することとなった。星先生は様々に気を配りT i n yを支えてきてくださったが、特にオンラインコンサートの際には動画作成に多大なご協力を頂き、コロナ禍の学生たちの活動を後押ししてくださった。昨年度の土沢先生の退任に続き、誠に残念ではあるが、心より感謝を述べると共に、今後もT i n yの活動を見守ってくださることを願っている。

来年度は就任2年目のフレッシュな松岡先生と学生たちと共に、そして卒業生やこれまでにT i n yに関わってくださった方々の力を借りながら、一つ一つの活動を丁寧に進めていきたいと考えている。各々の活動が地域の障がいのある子どもを持つご家族にとって、安心して楽しみながら、様々な体験のできる場となるよう工夫を重ねていきたい。

☆T i n yの活動メンバー

宇都宮共和大学子ども生活学部

教 員 大島美知恵

星 順子

松岡 展世

サークルT i n y 隊の学生たち

IV. 「親子遊びの会」 ー子育てネットワークづくりプロジェクトー 実践報告

子ども生活学部 専任講師 小野 貴之
子ども生活学部 教授 杉本 太平

1. はじめに

「親子遊びの会」は、これまで地域の子育て支援を学生ボランティアが中心となって様々な行事を主催してきた。今年度は「地域・人との繋がりを深める子育て支援」を目標として、地域の子育て支援サークルとの連携を深め、人との繋がりにから子育て支援のネットワークを広げていく試みを実践した。

アンケートの保護者の声からも、学生が主体的に活動を展開していることや、学生が一人ひとりの子どもに丁寧に関わる様子を評価していただいた。活動に参加した子どもの様子や保護者に向けたアンケートの結果等を踏まえて、今後も活動がさらに発展していくことができるように努めていきたい。

2. プロジェクトの目的

地域に暮らす未就学児をもつ家庭を対象として、父親を含めた親子同士、家族同士、異世代間の交流を目的とし、学生・教員ともに地域における役割について検討する。

活動に際しては、対象者が主体的に参加できることを目指し、親子で遊び、円滑な親子関係、親子同士の繋がりを促せるような援助のあり方について学生と教員ともに学ぶ。

3. 親子遊びの会2023年度の活動の計画

(1) 参加対象者

地域に在住の未就学児をもつ家庭

(2) スタッフ

教員と学生が活動内容について企画、準備を行い、当日の運営、援助等にあたる。

(3) 実施場所

本学施設 ミナテラスとちぎ

4. 実施した活動の概要

教員と学生有志ボランティアが検討した計画に沿って、各回のイベントの内容を決定し、当日までの準備を学内で行った。主には昼休みや放課後の時間を利用して、製作物の製作、司会、絵本の読み聞かせの練習を行った。当日は、親子が楽しんで安全に参加できるようにサポート役を務めた。

2023年度開催一覧

回 (通算)	開催日	活動内容	参加者 子ども	参加者 保護者	学生	教員	場所
1回 (49回)	2023年5月13日	ミニミニアスレチック	11人	8人	16人	3人	本学グラウンド
2回 (50回)	2023年11月4日	「親子リズム遊び」 「助産師講師による性教育講話」	23人	15人	18人	3人	本学アリーナ
3回 (51回)	2023年12月3日	お正月遊び	16人	19人	8人	3人	ミナテラスとちぎ

※12月に実施した「共和大・宇短大クリスマスマーケットinシティキャンパス」に共催参加

第49回親子遊びの会

活動の概略

1. 日 時：5月13日（土）10時00分～11時30分
2. 場 所：本学アリーナ
3. 参加者：子11名、母7名、父1名、学生16名、教員3名、見学者1名 合計39名
(1歳児3名、2歳1名、3歳児1名、4歳児6名)
※見学者：2023年度協力子育てサークル「とちぎ多胎ネット」の代表 南部裕子氏
4. コロナ対策：参加学生は2週間前より検温等の健康管理。当日はソーシャルディスタンスを配慮した環境構成、活動開始・後のアルコール消毒の実施。大人はマスク着用（教員・学生は白マスク）。

活動の内容と進め方

1. 内容：テーマ「ミニミニアスレチック！ぐりとぐらの世界で楽しもう！」
・ぐりとぐらの家まで体を使って遊びながら向かい、家ではお絵描きをして楽しむ設定。
・(後半) 子ども達に対して学生は絵本「おめんです」「へんしんバス」などの読み聞かせを行った。
2. プロジェクト参加教員：杉本、田所、小野
3. プロジェクト参加学生：(4年生) 海野史帆、高橋のりか、大友歩未、菊池葵、齋藤理桜、田村千愛希
(3年生) 西川綺華、鈴木京香、竹井愛美、齋藤優佳
(2年生) 秋野詩織、満田萌、村上芽唯、大貫陽香
(1年生) 柴田歩実、須藤桜子

4. 事前準備

打ち合わせ、準備、練習のため計5回集合して進めた。

5. 当日のスケジュール

- 8：30～ 学生集合、現地にて準備
9：45～ 参加者受付・入室
10：00～10：15 ごあいさつ、エビカニクス
10：15～11：10 4つのコーナーを中心にサーキット遊び



(フラフープくぐり、ダンボールタワー、巧技台渡り、ぐりとぐらの家でお絵描き)

11：10～11：30 (大人) 懇談、アンケート (子ども) 絵本の読み聞かせ

11：30～12：00 解散・片付け

12：00～13：00 学生振り返り ※南部氏と学生とで8月の共同研修会の打ち合わせも行う

6. 活動の振り返り

学生が主体的に運営を行い、事前の準備では意見の伝えあいや協力して取り組む姿が見られた。活動の際には子どもの気持ちや考えを大切にしながら関り、安全性を考慮しながら行うことができていた。また、子どもだけでなく保護者の方々ともたくさん話をして交流する様子が見られた。



保護者の方々からは「学生さんが主体となって企画しており、内容も子どものことをよく考えてくださっているなと感じました」「子どものペースに合わせて接してくれてよかったです」「とても楽しかったので、このような機会がたくさんあるとうれしいです」等の感想をいただいた。

子ども、保護者、学生の関りが活発に行われており子育て支援の場作りの意義があることを感じた。

第50回親子遊びの会実施報告書

活動の概略

1. 日時：2023年11月04日(土) 10時30分～12時00分

2. 場所：本学アリーナ

3. 参加者：13家族(子23人、母13人、父2人)、学生18名、教員3名 合計59名

(0歳2人、1歳6人、2歳3人、3歳1人、4歳5人、5歳5人、6歳1人)

活動の内容と進め方

1. 内容：「親子リズム遊び」

「助産師講師による性教育についての講話」

- ・親子でリズム遊び(一般社団法人Say Smileアカデミーの講師：並木裕子先生)
- ・助産師講師による性教育についての講話(柚木理恵氏)
- ・おうちでできる親子遊び
- ・家族同士や学生との交流
- ・大学と地域の子育てサークルとの協働の試み

2. 当日の参加教員(当日)：杉本、田所、小野

3. 当日の参加学生：(4年生)大友歩未、海野史帆、菊池葵、小林明日香、高橋のりか

(3年生)阿部さとみ、竹尾毬愛、西川綺華、根本桃華

(2年生)秋野詩織、大貫陽香、小林歩未、満田萌、村上芽唯

(1年生)秋山愛唯、柴田歩実、山田咲貴、吉田麻緒

4. 事前準備

保護者代表との打ち合わせ、学内準備、研修、練習など半年間に計10回程度の準備の機会があった。

5. 当日のスケジュール

- 8：30～ 学生集合、準備
- 10：00～ 参加者受付
- 10：40 挨拶、参加者紹介
- 10：50～11：50 みんなで体操
親子リズム遊び
- 11：50～12：00 「性教育について」の講話
- 12：00～12：10 写真撮影、アンケート
- 12：10～12：30 解散・片付け・振り返り



6. 活動の振り返り

今回は親子遊びの会の研修会でお世話になった「とちぎ多胎ネット」の方々と連携し、一般社団法人Say Smileアカデミーの講師をお招きして親子リズム遊びを行った。また、助産師の講師による性教育についての講話も行うことができた。

活動は未就園の子どもたちが大勢参加され、大盛況となった。保護者の方からは、「学生さんたちが子どもたちと丁寧に接してくださり、大変ありがたかったです」「双子なので、1人を見てもらえてとても助かりました」「親子運動遊びがいい運動になりました」との感想をいただいた。

交流を通して子育て中の方の声を聞く貴重な機会、また地域の方に学生の真摯な姿を知っていただくよい機会になったと考える。また、活動を通して、学生は親子のふれあいをねらいとした運動遊びや、安全に配慮して活動を行うための留意点等、様々なことを学ぶことができたのではないと思われる。

第51回親子遊びの会実施報告

活動の概略

1. 日 時：12月3日（日）10時30分～11時30分
2. 場 所：ミナテラスとちぎ（宇都宮市インターパーク6-2-1）セミナールーム
3. 内 容：テーマ「お正月遊び」

こまやお正月の飾りなど身近な素材を使って親子で楽しむ手づくりコーナー、段ボールでできた臼と杵を使ってみんなでお餅つき、など学生が計画実践する。

4. 対象者：2歳～未就学児をもつ家族（父親・母親・子ども）

募集：親子10組程度

参加者募集と受付 栃木トヨタが窓口

活動の進め方とタイムスケジュール

1. 参加者：親19人子16名+学生8名+教員3名 合計46名
2. プロジェクト参加教員：杉本、小野、田所
3. プロジェクト参加学生：（3年生）西川綺華、竹尾毬愛
（2年生）満田萌、小林歩未、大貫陽香、村上芽唯
（1年生）加藤龍人、山田咲希

4. 事前準備

- 第1回11月10日（金） 3 限 メンバー決定、内容検討
スケジュールの確認
- 第2回11月16日（木） 昼休み 役割分担
手作り素材準備
- 第3回11月24日（金） 昼休み 練習
- 第4回12月1日（金） 昼休み 最終打ち合わせ



5. 当日のスケジュール

- 9：00 現地集合
- 9：30 会場設営と準備
- 10：15 参加者受付
- 10：30 開始
- 11：30 終了 参加者見送り後、掃除・片付け
- 12：00 学生・教員解散



活動の振り返り

今回から4年生から引き継ぎ、3年生が主体となり計画・準備を進めていた。学外の環境で、初めて出会う方に活動を提案する経験はまだ不足している様子もあったが、互いに力を合わせて臨機応援に対処する姿も見られた。また、本学のプログラムを楽しみにしてくれているリピーターの方も家族で参加されていた。保護者の方からは、「ティッシュ箱などの使い方が参考になりました。家でも作ってみます」「手作りのおもちゃが温かみがあってとてもよかったです」「子どもが選択して、楽しそうに遊んでいました」「学生さんが一生懸命関わってくれて、とてもよかったです」との感想をいただいた。

5. 栃木県から「社会貢献青少年等」として表彰

地域の未就学児を持つ家庭を対象にした子育て支援活動を通して、地域の活性化や学生ボランティアの育成に貢献してきたことが評価された。また、学生有志の活動であり、会の数週間前からの準備にも熱心に取り組んでいて、親子の触れ合いから学び、経験者の多くが保育・福祉人材として巣立っている点も受賞の理由となった。



代表 菊地葵さん

6. 活動の振り返りと今後に向けて

本会では、大学を拠点にした子育て支援活動の可能性を広げていく試みと新たに地域の子育て支援団体・サークルと連携し、大学を地域の子育て支援団体・サークルを繋ぐ拠点として機能させていく試みを展開してきた。

2024年度はこれまでの試みの成果として、①大学を拠点にした子育て支援活動としての新たな方向性を確立していくこと、②活動を通しての学生の育ちを研究としてまとめ、地域の子育て支援を担う次世代育成の在り方・可能性を見出すことを課題に取り組みたいと考えている。

また2024年度は、「とちぎ多胎ネット」の依頼で、栃木県で開催される予定の「一般社団法人日本多胎支援協会主催全国フォーラム」への支援を行う計画を進めているところである。この計画の実現を通して、学生たちによる「親子遊びの会」の地域の子育て支援イベントへの出張参加の可能性も見出せるものと期待している。

(親子遊びの会 子育てネットワークづくり事業メンバー)

	代 表	教 授	杉本 太平
	子ども生活学部	教 授	河田 隆
		専任講師	小野 貴之
子育て支援研究センター客員研究員		非常勤講師	田所 順子
子育て支援研究センター客員研究員			今村 麻子

V. 地域産学官連携活動報告

V-1. 自然遊びの会・行事实践報告 ～親子ふれあいネイチャー事業～

桂 木 奈 巳

1 はじめに

自然遊びの会バーベナでは、2014年より、年に2～4回の頻度で大学内の子どもの森において、「自然遊びの会」を実施してきた。宇都宮市の事業である「みやの環境創造提案実践事業」において提案した事業の一環として企画する年度もあるが、2023年度はコロナウイルス感染症による制約がなくなったため、学生の希望を前面に押し出して行事を構成した。本団体では、活動場所である子どもの森の整備を行い、行事と整備をつなげる形態で進めている。整備の過程で出会う自然物を活かせる形で活動内容を考え、場所の手入れを行っている。各回ともに何らかの形で生物多様性を取り上げ、その季節に合うプログラムを検討し、親子を対象に実践を行っている。

2023年度は、昨年につきNPOうつのみや環境行動フォーラム・生物多様性部会（以下、環境行動フォーラムと略す）、「親子ふれあいネイチャー事業」として行事の合同開催を行なった。

2 「親子ふれあいネイチャー事業8月」の実施

2-1 実施の概要

実施の概要を表1に示す。環境行動フォーラム側は集客と参加者への連絡及び当日の受付や救急関係、バーベナ側はプログラムの検討を含めた行事の実施を担当した。

表1 行事实施の概要（8月）

実施日時	2023年8月5日（土） 10：00～12：00
実施場所	宇都宮共和大学内 子どもの森・アリーナ、図工室
学生スタッフ	4年：海野 史帆、立川ひかり、生出 梨紗 3年：山口 桂汰、根本 桃華(統括)、仲山 日菜(統括)、坂本 有偉(統括) 2年：天谷 優里、山本 侑奈
プログラムの内容	①色棒さがし ②昆虫採集と観察 ③バードコール ④竹の水鉄砲
参加者数	参加者 41名（保護者19名、子ども22名）

2-2 活動の様子

資料1に活動の様子を示す。最初に行った「棒さがし」の効果か、今年はバッタやコオロギ等以外にも多くの種類の生物が見つかった。「ヤマナメクジ」の大きさに驚く子どもが印象的であった。森から室内に移動して行った「バードコール作成」は卒業研究の実践として、過去2回の実践を改良して提供した。「竹の水鉄砲」は3年ぶりの実施で、学生は自ら水着を着用して水を浴びる準備をしていた。

資料1 活動の概要 (バーベナのサイトより抜粋)

大学内で、定例イベントを実施しました。NPOうつのみや環境行動フォーラム様との共催でした。最初に「棒さがし」。地面に撒かれた色付きの棒を探します。見つかりやすい色・見つかりにくい色を知り、生き物のカモフラージュについて考えます。

次に「虫探し」。この森には、カブトムシやクワガタ、国蝶であるオオムラサキも暮らしていますが、行事内では見つかりません。

後半は室内に移動し、「鳥クイズ」と「バードコール作り」。鳥の鳴き声クイズでは、ある鳥の鳴き声を聞いていただき、パネルで示した2種類の鳥から正解を選んでもらいます。その後、バードコールを作りました。

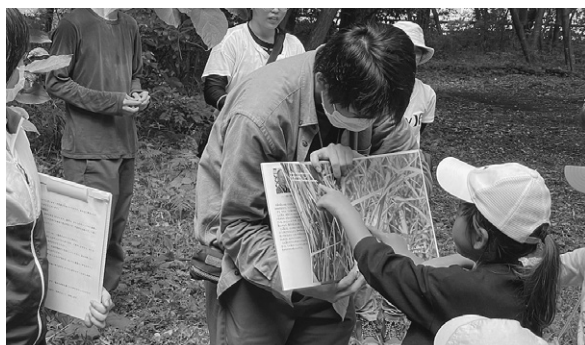
最後に熱中症予防も兼ねて？竹の水鉄砲を作り、外で遊びました。学生さんも濡れることを想定し、中に水着を着ています。

天気が良く、暑かったですが、さすがしく活動できました。大学での夏の開催は3年ぶり、私たちも久しぶりに開放感を味わいました。



○棒探し

5cmの竹ひごに、7色の色を塗った棒×30本が地面にばら撒かれています。ピンクや水色などの棒が次々と発見されます。



絵本でかくれんぼしている虫を探してもらいます。同じ色だと見つけにくいです。どうして隠れているのか?についても考えます。



○虫探し

目が慣れたところで、本物の虫探し。虫たちは上手に隠れています。



○鳥クイズとバードコール作り

「ハシボンガラス」と「ハシトガラス」の鳴き声を聴いてもらい、「どっちでしょう?」難易度が高すぎる質問も。



○水鉄砲づくり

軸にスポンジを巻く作業は、その太さ調整がなかなか難しいです。



上手に水が飛ばせています。学生さんが「的」になるのは恒例。暑い中、びしょ濡れになって気持ち良かったです。

3 「親子ふれあいネイチャー事業11月」の実施

3-1 実施の概要

実施の概要を表2に示す。運営体制は8月に実施した行事と同様である。

表2 行事实施の概要（11月）

実施日時	2023年11月25日（土） 10：00～12：00
実施場所	宇都宮共和大学内 子どもの森・アリーナ、図工室
学生スタッフ	4年：海野 史帆、生出 梨紗 3年：山口 桂汰（統括）、根本 桃華、仲山 日菜、坂本 有偉 2年：天谷 優里、山本 侑奈
プログラムの内容	①カモフラージュ ②むしむしびんご ③みのむし作り
参加者数	参加者 14名（保護者6名、子ども8名）

3-2 活動の様子

資料2に活動の様子を示す。最初に行った「カモフラージュ」は、ギリースーツ（迷彩服）を着用した学生を探すゲームで、自然界で擬態する戦略を持つ動物の理解を促進する目的で行った。続く「むしむしびんご」で虫探しをする視点となるように配慮した。当日は気温も低かったが、落ち葉や土の中で暖をとる虫が多くみつかった。毎年、休憩もかねて制作を行っているが、今年は木の皮に自然材料を貼り付けた壁飾りを作成した。共に相談しながら作り上げる親子や、子どもが作成する姿を見守る保護者、自分自身が夢中になって作成する保護者等、さまざまな親子のかかわりが見られた。

資料2 活動の概要（バーベナのサイトより抜粋）

大学内で、定例イベントを実施しました。NPOうつのみや環境行動フォーラム様との共催でした。
最初に「カモフラージュ」。人が本当に隠れる時に使う服「ギリースーツ」を着た学生さんが、森の中に隠れています。遠くからみて、どこにいるか探します。だんだん近寄ると、周りとの違和感がわかります。
次は「むしむしびんご」。「みどりのむし」「8ほんあし」「ぬげがら」など、色々な「虫」を探します。今年はお馴染みの「ザトウムシ」や「ジョロウグモ」の他、「アカスジキンカメムシ」の幼虫もいました。人の顔に見える面白い模様を持っています。
その後、木の皮に自然物を貼り付ける制作活動を行いました。最初は「みのむし」を作る予定でしたが、方向が違ってきてしまいました。素敵な作品ができたのでヨシとしました。
今年はとても寒かったので、火をおこしてお迎えしました。子どもたちも火に興味津々でした。



○カモフラージュ

まずは、この線から向こうをみて、どこに人が隠れているか探します。わからないと思います。



こういうギリースーツを着た人たちが隠れていました。



○むしむしびんど

自作の「むしむしびんどカード」を使って、森の中で虫探し。恒例のゲームですが、毎年違う生き物に出会えます。



寒いので、落ち葉の下や丸太の下に隠れています。



○ミノムシ作り

材料を選ぶのが楽しそうです。かぼちゃの種やピスタチオの殻など、自然物の廃材を利用しました。



親子で仲良く製作中。微笑ましいです。

4 おわりに

今年度はコロナ前と同じスタイルで行事を運営した。プログラムの内容も通常時に戻すよう試行錯誤を行なった。学生同士は日頃から整備活動等でコミュニケーションを図っており、よいチームワークで臨め、運営は順調であった。しかし、スタッフも参加者も3年間の制約に慣れたのか、急にコロナ前に戻ることは難しい様子であった。スタッフ側も一歩引いて見守る対応方法が抜けず、参加者側も遠慮がちな様子であり、コミュニケーション等の取り方に課題が見出された。

コロナウイルス感染症の流行による外出自粛の影響で、保育施設や学校では行事などの中止が相次ぎ、屋外で子どもが自然と触れ合う機会もますます減少したようである。実際に、ここ数年の参加者の反応は以前と異なるように感じる。すなわち、家族間の交流が減り、参加者同士で教え合う姿が見られない。さらに自然に対する好奇心の表出が抑えられている印象を受ける。この数年の体験活動の抑制が、今後の子どもに及ぼす影響が懸念される。

V-2. 大学地域連携活動支援事業「親子遊びの会」

子ども生活学部 専任講師 小野 貴之
教授 杉本 太平

1. 活動の趣旨

令和5年度は、「地域・人との繋がりを深める子育て支援」を目標として、地域の子育て支援サークルとの連携を深め、人との繋がりから子育て支援のネットワークを広げていく試みを実践した。昨年度の活動から、コロナ禍によって、地域の「子育てサークル」が活動場所を失い、参加者の減少による活動の縮小や中止・廃止などの困難な状況に直面していることが明らかとなった。その中で、保育者養成の大学として地域の子育て支援の一翼を担う社会的な役割をどのように果たすべきか、繋がりがあった子育てサークルとの協働活動を通して学生と共に模索した。

2. 活動の実績

今年度の親子遊びの会の活動のうち、大学地域連携活動支援事業に関わる活動を表1に示す。

表1 令和5（2024）年度の栃木県大学地域連携活動支援事業活動実績

事業名	事業の実施内容	事業の成果
「ミニミニアスレチック！ぐりとぐらの世界で楽しもう！」	5/13本学アリーナにてイベントを開催。親子が共に遊ぶ内容を盛り込むとともに、親同士が教員を交えて語り合う時間を持った。	親8名、子11名、学生16名、教員3名、見学者1名 合計39名 子どもだけでなく保護者の方々ともたくさん話をして交流する様子が見られた。保護者の方々からは「学生さんが主体となって企画しており、内容も子どものことをよく考えてくださっているなと感じました」「子どものペースに合わせて接してくれてよかったです」「とても楽しかったので、このような機会がたくさんあるとうれしいです」等の感想をいただいた。子ども、保護者、学生の関りが活発に行われており子育て支援の場作りの意義があることを感じた。
勉強会「子育てサークルと地域・大学との連携可能性について」	8/19「多胎児を育てる親の困難感や子育て支援のニーズ」に関する研修を実施。多胎児サークルの活動と歩み、今後の方向性、活動を通して感じていること、保育者に期待していること等をお話いただいた。	ボランティア学生が研修を受け、子育てサークルがどのようなものか、地域の子育て支援に大学生がどのように関わられるかを学ぶことができた。
活動に向けての打ち合わせ	10/11、10/12本学にて、学生代表と子育てサークルの代表者、教員での打ち合わせを行った。	11/4の親子フィットネスイベントに向けた打ち合わせを行うとともに子育て期の親のニーズのヒヤリングも行うことができた。地域のサークルとの繋がりが生まれた。
(地域への報告) 大学コンソーシアム・栃木県表彰	11/16栃木県公館で栃木県青少年健全育成成功労者の表彰式に参加。 12/2大学コンソーシアムとちぎ主催学生発表コンテスト「第30回学生&企業研究発表会」に参加。	栃木県から「社会貢献青少年等」の表彰を受けた。 親子遊びの会の取り組みを地域に発信することのできる機会となった（「地域社会貢献・人材育成分野A」の分野で「栃木銀行賞」受賞）。

<p>「親子リズム遊び」 「助産師講師による性教育についての講話」</p>	<p>11/4 本学アリーナにてイベントを開催。 親子遊びの会の研修会でお世話になった「とちぎ多胎ネット」の方々と連携し、一般社団法人Say Smileアカデミーの講師をお招きして親子リズム遊びを行った。また、助産師の講師による性教育についての講話も行うことができた。</p>	<p>親15名、子23名、学生18名、教員3名 合計59名 活動は未就園の子どもたちが大勢参加され、大盛況となった。保護者の方からは、「学生さんたちが子どもたちと丁寧に接してくださり、大変ありがたかったです」「双子なので、1人を見てもらえてとても助かりました」「親子運動遊びがいい運動になりました」との感想をいただいた。交流を通して子育て中の方の声を聞く貴重な機会、また地域の方に学生の真摯な姿を知っていただくよい機会になったと考える。また、活動を通して、学生は親子のふれあいをねらいとした運動遊びや、安全に配慮して活動を行うための留意点等、様々なことを学ぶことができたのではないかと思います。</p>
<p>「お正月遊び」</p>	<p>12/3 地域コミュニティ施設ミナテラスとちぎにて「お正月遊び」イベントを開催。こまやけん玉、お正月飾りを親子で手作りするワークショップ。子どもたちがお餅つきごっこも体験した。</p>	<p>親19名、子16名、学生8名、教員3名 合計46名 本学のプログラムを楽しみにしてくれているリピーターの方も家族で参加されていた。保護者の方からは、「ティッシュ箱などの使い方が参考になりました。家でも作ってみます。」「手作りのおもちが温かみがあってとてもよかったです」「子どもが選択して、楽しそうに遊んでいました。」「学生さんが一生懸命関わってくれて、とてもよかったです」との感想をいただいた。</p>
<p>「クリスマスマーケット」</p>	<p>12/9 宇都宮共和大学シティキャンパスにて開催されたクリスマスマーケットで、親子でクリスマスを楽しめる場を提供することを意義とし、絵本や紙芝居の読み聞かせ、ペープサートなどを行った。最後は学生と一緒にクリスマスの歌やダンス、廃材を使ったオリジナル楽器を使って合奏などを子ども達と一緒に行った。また、製作コーナーではクリスマスカードの製作を行った。</p>	<p>地域の親子10数組（自由参加）、学生12名、教員3名 参加した子ども達は、始め座って手遊びをしたり絵本や紙芝居を聞いていたが、ペープサートやエプロンシアターがはじまると、近くに寄り、クイズに答えたり学生と一緒に物語の登場人物の名前を呼んだりしていた。制作コーナーでは、子どもが画用紙にパーツやシールを貼り、思い思いのサンタやトナカイをモチーフにしたクリスマスカード制作を楽しんでいた。</p>
<p>(情報収集・調査) 国際子ども図書館視察</p>	<p>12/17国際子ども図書館を学生3名、教員2名が視察。 「おいしい児童書」という展示会が行われていた。</p>	<p>様々な食に関する絵本や海外ならではの色の使い方、食の違いなど多様性が育まれるような絵本に関する情報収集ができた。</p>
<p>「親子遊びの会 食育絵本紹介」チラシを作成</p>	<p>親子遊びの会の研修で国際子ども図書館の「おいしい児童書」の展示会に行った際に、特に子どもたちに読んでもらいたい食育の絵本として選んだ8冊の絵本をご紹介するチラシを作成した。</p>	<p>今後の活動で参加された方々に配布する予定。</p>
<p>成果報告書作成</p>	<p>栃木県への大学地域連携活動支援事業活動実績として成果報告書を作成した。令和5年度の会の計画や実績を記録し、次年度以降に続ける際の資料となる内容とした。</p>	<p>90部作製。県への報告とボランティア学生及び連携先に配布した。</p>

3. 連携先

特定非営利活動法人とちぎ多胎ネット
南部 裕子

子育てサークル「kodomomフィットネス」
代表 武内 麻衣

4. 成果目標に対する達成状況

子どもと保護者がさらに深く関わるができるように、様々な地域連携活動を実施することができた。また、子どもにとって豊かな経験ができる場の提供だけでなく、保護者同士の情報共有や関わりの場を実現することができた。来年度は、「とちぎ多胎ネット」との連携をより深めていくと同時に、連携する子育てサークルをさらに増やしていくことができると考えている。

年度末には東京研修の学びを活かした「親子遊びの会 食育絵本紹介」のチラシを作成した。今後、活動参加者等に配布し、家庭での食育活動の情報提供を行いたい。

学生は30人程度が熱心に企画、実施、調査等の活動に参加した。地域の「子育て支援」への関心や子ども理解を深め、保育士・幼稚園教諭として子育て支援の実践力を蓄える活動になったと考える。

5. 実施した内容

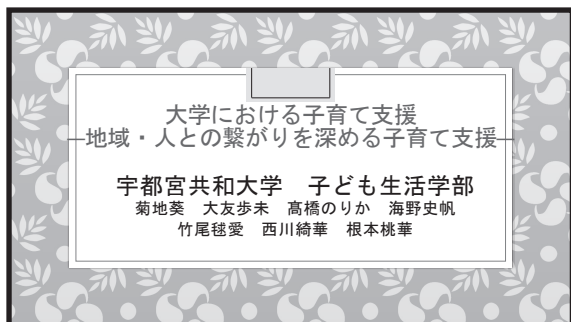
本事業の内容の一部を成果報告会における発表内容を報告する。

(1) 大学地域連携活動支援事業成果報告会

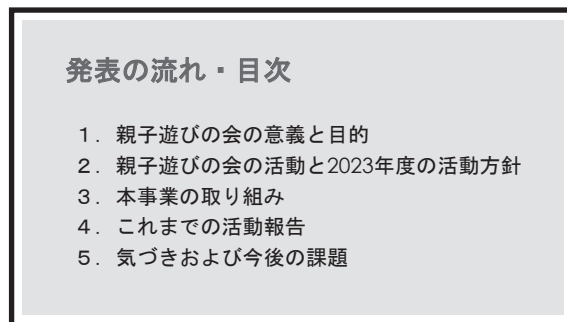
期 日 令和6年2月5日

場 所 栃木県庁 本館6階 大会議室1 (栃木県宇都宮市塙田1-1-20)

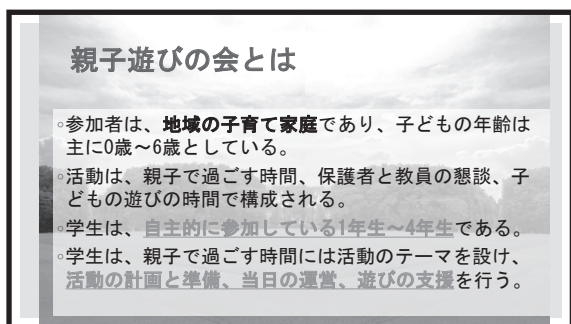
発表者 菊地葵、大友歩未、高橋のりか



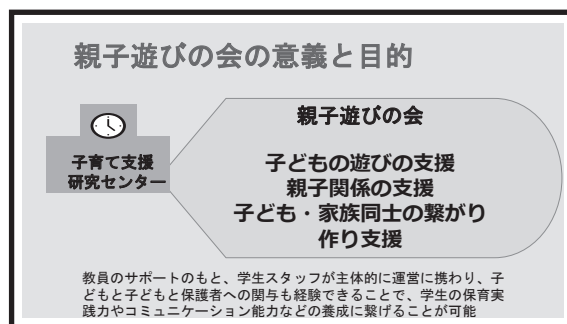
1



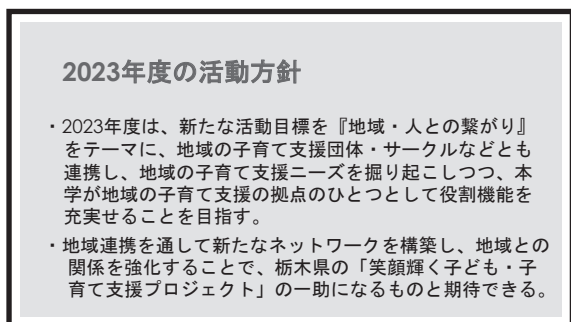
2



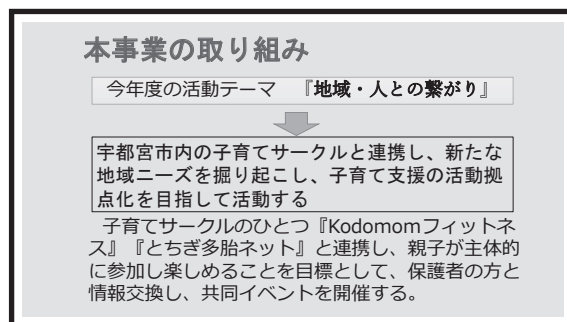
3



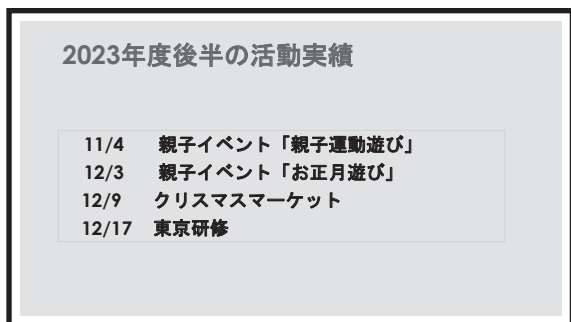
4



5



6



7



8



9



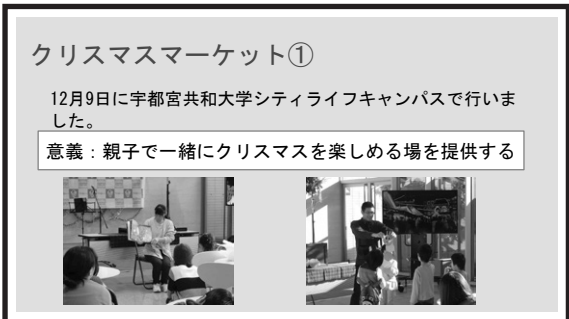
10



11



12



13



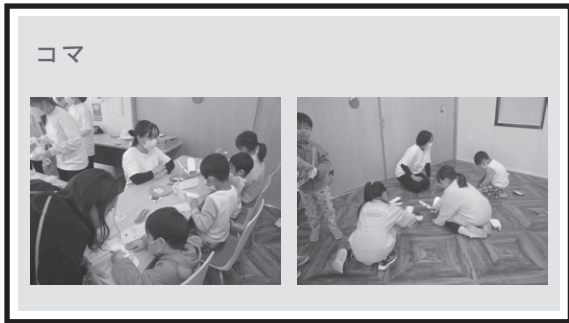
14



15



16



17



18



19



20



21



22

2023年度後半までの活動からの気づき

1. 子育て支援の講師との活動を行うことで、親子交流の機会や子育ての知識を保護者に提供することができた。また、学生も講師との活動の中で子育て支援の方法を学ぶことができた。
2. それぞれの活動を終えてからの反省評価を行った。次の活動には反省評価を活かし、取り入れていくことで、活動の準備や活動内容をより良くしていくことができた。
3. 親子遊びの会で作成した絵本の紹介、玩具の作り方、親子遊びの会の紹介等の資料を提供していくことも、間接的な子育て支援となり得ることを学ぶことができた。

23

今後の課題

1. 子育て支援の講師との交流を重ねて、支援の方法を身に付け、それを実践に活かしていきたい。
2. 今後の子育て支援の活動に向けて、学生ボランティアの中で活動の意義について意見交換を行い、共通理解を深める。
3. 子育て支援に活用できる資料を作成提供していくことで、間接的な子育て支援の質を高めていきたい。

24

6. おわりに

子どもと保護者がさらに深く関わるができるように、様々な地域連携活動を実施することができた。また、子どもにとって豊かな経験ができる場の提供だけでなく、保護者同士の情報共有や関わりの場を実現することができた。来年度は、「とちぎ多胎ネット」との連携をより深めていくと同時に、連携する子育てサークルをさらに増やしていくことができると考えている。また、年度末には東京研修の学びを活かした「親子遊びの会 食育絵本紹介」のチラシを作成した。今後、活動参加者等に配布し、家庭での食育活動の情報提供を行いたい。

学生は30人程度が熱心に企画、実施、調査等の活動に参加した。地域の「子育て支援」への関心や子ども理解を深め、保育士・幼稚園教諭として子育て支援の実践力を蓄える活動になったと考える。

令和5年度栃木県大学地域連携支援事業「親子遊びの会」メンバー

大学名	学部・学科	学年	氏名	
宇都宮共和大学	子ども生活学部 子ども生活学科	4年	1	大友 歩 未
			2	海野 史 帆
			3	菊池 葵
			4	小林 明日香
			5	齋藤 理 桜
			6	高橋 のりか
			7	田村 千愛希
			8	利根川 沙 希
			9	中島 彩
		3年	10	阿部 さとみ
			11	齋藤 優 佳
			12	下山 ひかる
			13	鈴木 京 香
			14	竹井 愛 美
			15	竹尾 毬 愛
			16	西川 綺 華
			17	根本 桃 華
			18	村井 彩 乃
		2年	19	秋野 詩 織
			20	大貫 陽 香
			21	小林 歩 未
			22	満田 萌
			23	村上 芽 唯
		1年	24	青木 愛 春
			25	青木 優 果
			26	秋山 愛 唯
			27	市村 真 由
			28	大嶋 杏 奈
			29	加藤 龍 人
			30	小松崎 柊 風
			31	小山 美 希
			32	佐藤 ひなの
			33	柴田 歩 実
			34	鈴木 愛 実
			35	須藤 桜 子
			36	中野 瑠 来
			37	野澤 美祐希
			38	前田 麻 衣

V-3. 大学コンソーシアムとちぎ第20回学生&企業研究発表 報告—地域・人との繋がりを深める子育て支援—

宇都宮共和大学子ども生活学部「親子遊びの会」

菊地 葵、高橋のりか、海野 史帆、大友 歩未、
竹尾 毬愛、西川 綺華、根本 桃華

【概要】 宇都宮共和大学子ども生活学部における子育て支援活動「親子遊びの会」の実践研究について報告する。親子が楽しめるイベントの改善をくり返すなかで、①親子ともに充実する支援内容、②子どもの自己表現を促す活動、③安心できる受容的な働きかけが重要であることが見出された。また、活動の提供が、学生にとって保育実践の学びとしての意義があることが分かった。

【栃木を元気にするには】 宇都宮市のKodomomフィットネス、小山市のとちぎ多胎ネットと連携し、保護者や子どものニーズを学ぶ→子育てサークルの保護者と遊びのプログラムを開発する→親子がともに笑顔で楽しむ・子どもと学生が遊ぶ間安心して相談ができる→活動を通して学生は環境構成、教材研究、子どもの援助を学ぶ→実践力をつけて保育者として現場に出ることができ、地域の親子に還元できる。また、子育てサークルなど地域交流を強化し本大学が保護者にとって憩いの場になる。この循環が地域の子ども・保護者・保育者から栃木を元気にすると考える。

1. 「親子遊びの会」の意義と目的

宇都宮共和大学「子育て支援研究センター」事業のひとつである「親子遊びの会」（以後、本会）では、子どもの遊びの支援、親子関係の支援、家族同士の繋がり作り支援を目的にさまざまな遊び・活動を行っている。本会は、教員のサポートや助言をもとに、学生スタッフが主体的に活動スケジュールや環境構成、制作等に携わり、実際の運営も行い、直接、子どもと保護者への関与も経験できることで、学生の保育実践力やコミュニケーション能力などの養成に繋げることも、本会の目的となっている。

2. 本会の概要

参加者は、地域の子育て家庭であり、子どもの年齢は主に0歳～6歳である。活動は、親子で過ごす時間、保護者と教員の懇談、子どもの遊びの時間で構成される。親子で過ごす時間には活動のテーマを設け、学生は活動の計画と準備、当日の運営、遊びの支援を行う。学生は、自主的に参加している1年生～4年生である。

3. 昨年度活動実績

昨年度の活動実績は、右の通りである。

第1回	5/7	親子イベント「忍者ごっこ」
場所：宇都宮共和大学長坂キャンパス		
第2回	11/26	親子イベント「親子フィットネス」
場所：宇都宮共和大学長坂キャンパス		
第3回	12/11	親子イベント「お正月遊び」
場所：ミナテラス		

4. 本研究の目的

本会では、毎活動の満足度が高いことから、リピーター率が高い。また、感染症の拡大から、子育て支援に求められるニーズの変化や地域との連携が薄れているよう思われ、本研究では以下の目的を設定した。

- ①子育てサークルと連携し、保護者と子どものニーズがどのように変化しているのかを知る。
- ②親子のニーズに適した活動を運営するための方法を開発する。
- ③子どもが主体的に遊び、親子で楽しむために、学生が行うべき援助、配慮とはどのようなものかを検討する。

この3つの目的について、プログラムの検討、教材研究及び実践と省察により明らかにする。

5. 方法

(1) 子育てサークルとの連携

2023年度の活動テーマを『地域・人との繋がり』とし、地域の子育て支援団体・サークルなどとも連携し、地域の子育て支援ニーズを掘り起こしつつ、本学が地域の子育て支援の拠点のひとつとして役割機能を充実せることを目指している。具体的には、昨年度連携した宇都宮市の子育てサークル『Kodomomフィットネス』に加えて、新たに小山市の子育てサークル『とちぎ多胎ネット』と連携し、共同研修を重ね、地域のニーズに適した活動、環境構成、教材などを検討し、親子が主体的に参加し、楽しめることを目標としたイベントを計画・実施する。

(2) 実践

今年度は3回の親子イベントを計画・実施する①5/13「ぐりとぐらのアスレチック」②11/4「親子フィットネス」③12/3「お正月遊び」である。また、地域子育てサークルの保護者と共同会議や共同研修（8/19）を行う。

(3) 省察

活動後に毎回ミーティングを行い、学生、教員が実践について検討・考察を行った。

6. 結果

(1) 第1回活動実践

ここでは5月の活動について報告する。第1回の活動のテーマは、『ぐりとぐらのアスレチック』であった。「親子で体をたくさん動かす」をねらいとし、体育館でサーキット遊びを行った。コーナー遊びとして、5つの遊びを学生が考え実践した。

a. フラフープコーナー

床の上に置かれた大きさが異なるフラフープを跳んだり走ったりして渡る。始めは、跳んだり走ったりして渡る子どもが多かったが、途中からはフラフープをトンネルに見立ててくぐったりフラフープを投げて遊んだり遊びが発展していく様子が見られた。



(写真1) 段ボール崩し

b. 段ボール崩し

始めは慣れていないからか手を使って段ボールを崩す姿が多かったか、慣れてくると蹴ったり

体当たりしたりして段ボールを崩すなど全身を使って活動をしていた。学生が段ボールを積むのを見て、子どもが興味を持ち、真似して積んでみたり、新しい積み方を見つけたりするなど、工夫しながら遊ぶ姿が見られた。

c. 巧技台

バランスを取りながら渡る。始めは慎重に渡ったり、保護者と手をつないだりして渡っている子どもが多かったが次第に走って渡ったり巧技台の上で体を揺らして遊んでいる様子が見られた。途中で巧技台から落ちてしまった女児がいたが、また巧技台の上に登って最後まで渡りきるなど挑戦する姿が見られた。



(写真2) 巧技台

d. トンネル

始めはトンネルの前まで来ると怖がって入れない女児がいたが、保護者がトンネルの透明な部分から顔を見せると安心してトンネルに入る姿が見られた。途中からは、トンネルが怖いものではないということが分かり、自らトンネルに入れるようになっていった。また、トンネルの透明な部分から顔を出し学生と笑顔で手を振って遊んでいる様子も見られた。

e. 秘密基地

始めはゴールすることが嬉しく、メダルをもらって保護者に見せに行く姿が見られたが、2週目からは秘密基地の壁に自由に絵を描く姿が見られた。少し不安になると窓からのぞいて保護者の姿を見ることで安心して遊びに戻り、学生と一緒に楽しそうに絵を描く姿が見られた。

(2) 子育てサークルとの共同研修

子育てサークルとの連携を深め、本会の活動の意義や本研究の目的を全体で共有し、結束力を強め、新たな運営方法の可能性を探ることをねらいとし、子育てサークル『とちぎ多胎ネット』の方々と多胎児を育てる親の困難感や子育て支援ニーズについて共同研修を行った。(写真3)(8/19)。また、本研修の成果として多胎児家庭向けの親子フィットネスイベントを11月に開催する運びとなった。現在は、11月に開催予定である親子フィットネスについて、講師との打ち合わせや企画・運営の検討、学生サポートの方法、事前準備などについて、協議を重ねている。

『子育てサークルの意義と課題』：8月19日(金)にとちぎ多胎ネットの南部裕子先生、山本緑先生に依頼し、現代社会の多胎児を育てる保護者のニーズの変化や子育て支援ニーズ、保育者に期待していること、子育てサークルと大学が連携する意義について研修を行った。



(写真3) 共同研修

日本では現在、年間に出産する女性の100人に1人が多胎児を出産していること、その点を踏まえて多胎児家庭も利用しやすい育児支援が重要であることを学んだ。また、今まで一人っ子や、きょうだいのいる子どもとは親子遊びの会での活動に関わることができていたが、多胎児とはあまり関わったことがなかったため、研修を通して多胎児の生活や子育て支援のニーズについて知ることができた。また、これから保育者になってからは子育て支援をしていく立場になるため、多胎児と関わる際に積極的にコミュニケーションを取っていくことで、些細な心境の変化にも気づいていけるようにしていきたいと感じた。

7. 考察

今年度前半の活動から、子育て支援を行うためには、様々な子育て支援の団体やサークルと連携を広げることで、新たな子育て支援のニーズを知ることが大切であることを学んだ。また、保育者としても個々の家庭の支援ニーズを知り、具体的な支援方法を考えていくことが求められていることを学ぶことができた。子育てサークルのイベント運営方法について学ぶことは、本会だけでなく、保育の計画や準備、運営、遊び支援を学ぶことになり、学生にとっても大きな意義がある。

8. 結論

本会は、子育てサークルと連携したことで、幅広い子どもの発達支援、保護者支援、親子の関係性支援としての効果がより強まると推測する。学生は、親子フィットネスについて実践的な学びを得ることができた。また、パンフレット製作を通して、親子のニーズに適した情報について学ぶことができるといった地域人材育成の効果があると考えられる。親子に寄り添った活動が充実するプログラム開発を行うことは、親子にとってもメリットであり、学生にとってもメリットがあることが分かった。そして、学生が遊び活動を企画し、実践していく中で活動方法によって親同士の交流を活性化したり、親子の関わりを広げたりするような効果が得られることが考えられる。この活動を通して、子どもに即して環境構成を新たに創造する力や活動を振り返りながら新たな可能性を検討する力、保護者の想いを理解し支援方法を考える力などが向上したと考える。

9. 今後の課題

- ・地域の親子に寄り添った実践が行えるよう、子育てサークルとの連携を継続していく。
- ・親子の交流や子ども同士の交流、親同士の交流が活性化できるようなプログラム開発に向けて学生同士の学び合いを深めていきたい。
- ・子育て支援団体や子育てサークルのネットワークの仲介的な役割を果たせるような方策を検討したい。

V-4. 宇都宮市環境学習センター事業の実施

桂 木 奈 巳

1 はじめに

自然遊びの会バーベナでは、2020年度より「環境学習センター事業」として、宇都宮市環境学習センターにおいて自然遊びの行事を受託している。環境学習センターでの行事の実施は、宇都宮市環境出前講座として受託していた頃を含めると7年目になる。本行事は、NPO宇都宮環境行動フォーラムとの協働で実施しているが、市の環境課題の一つである「生物多様性」を前面に出すことが求められている。行事の開催は毎年同じ場所であるが、スタッフとなる学生は卒業年度まで継続して関わることが通例で、毎年新たな学生も加わり運営している。学生が入れ替わると視点が異なる利点を活かし、毎年、定番プログラムに若干の改良を加えて継続している。2023年度は7月と1月の2回の行事を実施した。

2 「親子で楽しく自然体験in環境学習センター7月」の実施

2-1 実施の概要

実施の概要を表1に示す。今年度もスタッフとなる学生の負担減のため、学生の下見は実施しなかった。大学内での準備の他、リハーサルは当日の朝に現地で簡単に実施した。

行事の周知は「市報うつのみや」にて行い、受付は環境学習センターが対応した。受付当日に定員を超える申し込みがあり、例年、人気の講座となっている。

表1 行事实施の概要

実施日時	2023年7月29日（土）10：00～12：00
実施場所	クリーンパーク茂原東側林地
学生スタッフ	4年：立川ひかり、生出 梨紗 3年：根本 桃華、仲山 日菜、坂本 有偉 2年：天谷 優里（統括）、山本 侑奈（統括）
プログラムの内容	①ノーズ ②昆虫採集 ③生き物美術館 ④万華鏡・タペストリー
下見・打合せ	7月18日（火）10：00～11：30
参加者数	34名（保護者16名、子ども18名）

2-2 活動の様子

当日の活動の様子を資料1に示す。昆虫採集への期待が高く、参加者は捕虫網を持参して来場していた。実際に採集できるのはバッタやコオロギが多いが、捕まえることが出来て感激している様子が見られる。例年、虫が触れないため、網の中にある虫を容器に移せない親子が散見されるが、年々、この傾向が高くなっている。虫に詳しい学生が採集した虫をいくつか取り上げ、その生態等を解説したが、特に保護者からの質問が多かった。後半に実施した万華鏡づくりは、制作キットを用い、周辺に生えている葉や小さな花を入れて楽しんでもらった。タペストリーづくりは土台に夏の素材を貼るだけの簡易版としたが、完成度の高い作品が出来上がった。

資料1 活動の概要（バーベナのサイトより）

宇都宮市環境出前講座「親子で自然体験 in 環境出前講座」を実施しました。
 まずは「ノーズ」。これから出会えるかもしれないある生き物の特徴のヒントを順に紹介し、正解を考えます。
 毎年行っている「虫取り」。カブトムシやクワガタなどの子どもに人気の生き物は隠れていて出てきてくれませんが、身近にいるバッタ類がたくさん見つかりました。
 後半は「万華鏡」と「タペストリー」作り。万華鏡は、自然物の中に入れて楽しめます。自然のいろいろなカタチに気づく活動です。「タペストリー」は土台にドライひまわりや貝殻などを貼り付け、夏風に仕上げました。
 暑い中での活動でしたが、熱中症などもなく無事終了しました。参加くださった皆様、環境学習センターの方々には大変お世話になりました。



○ノーズ

カブトムシやセミなど、よくいる虫を題材にしました。特徴から答えを考えるのは意外と難しいです。



答えがわかったら、黙って鼻に手を当て、わかったサインを出します。子どもたちは、答えがわかると言いたくなりますよね。コソコソ答えをささやいています。



○虫探し

お待ちかねの虫探し。どんなところに隠れているか、捕まえ方などを学生さんが説明しています。カブトムシ狙いの子どもが多いですが、ここではそう簡単につかまりません。



草ぼうぼうなのは、虫取りのために草刈りを待っていたからです。たくさんの虫が隠れています。今回は「バッタ釣り」もしてみました。



捕まえた虫を紹介しています。ツマグロヒョウモンやショウリョウバッタなど。オスメスの大きさの違いなども紹介しました。



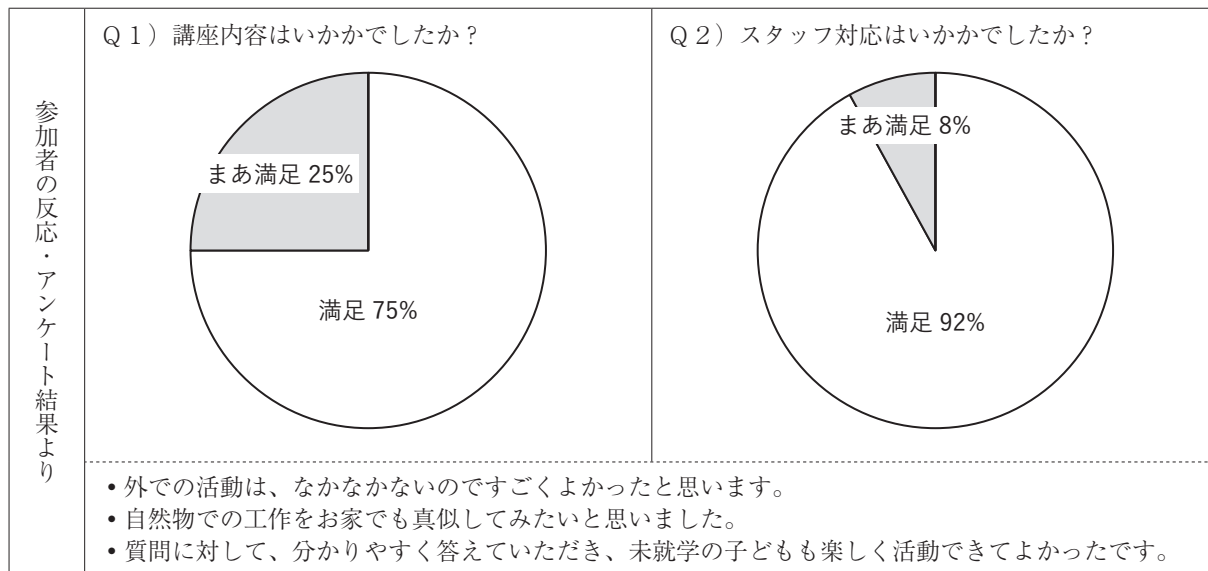
○万華鏡とタペストリー作り

万華鏡に、身近に生えている草や花をいれ、くるくる回すととても綺麗です。タペストリーは土台に季節の素材を貼り付けました。

2-3 参加者の反応

資料2に環境学習センターによる総括・評価、および参加者（保護者）に依頼したアンケート結果の一部を示す。概ね良い評価をいただいた。

資料2 親子で楽しく自然体験in環境学習センター 参加者へのアンケート結果



3 「親子で楽しく自然体験in環境学習センター1月」の実施

3-1 実施の概要

実施の概要を表3に示す。今回は実施日が必修授業と重なったため、学生スタッフの確保が困難であった。

表3 行事実施の概要（1月）

実施日時	2024年1月20日（土）10：00～12：00
実施場所	クリーンパーク茂原東側林地、環境学習センター4階
学生スタッフ	4年：立川ひかり、生出 梨紗 3年：仲山 日菜（統括）、坂本 有偉、山口 桂汰
プログラムの内容	①カモフラージュ ②生き物発見ラリー ③紅花コースター染
下見・打合せ	1月5日（金）9：30～10：30
参加者数	41名（保護者20名、子ども21名）

3-2 活動の様子

活動の様子を資料3に示す。今年度、屋外でのプログラムである「カモフラージュ」は学生の卒論実践とした。冬越ししている生き物探しは「動物発見ラリー（ネイチャーゲーム）」として、5箇所のポイントを設けてそれぞれを学生が担当し、探しにきた参加者への対応を行なった。屋内での制作は、「教草」の中の「べに一覧」を紹介し、紅花を使用したコースター染めを行なった。火を使わずに袋の中で染める方法を考案し、水場が遠い場所でも染色ができるよう工夫した。参加者は鮮やかなピンク色に染まったコースターに満足した様子であった。

資料3 活動の概要（バーベナのサイトより）

宇都宮市環境出前講座「親子で自然体験 in 環境出前講座」を実施しました。
 最初にアイスブレイクとして「カモフラージュ」。今回は32種類の人工物を植え込みに隠しました。見つけやすいもの・見つけにくいものを理解して、次の「生き物発見ラリー」へ。
 「生き物発見ラリー」では、「穴あきのどんぐり探し」「ウメノキゴケ」「クヌギカメムシの卵塊」「カイガラムシ」「ジョロウグモの卵塊」を探し、生物の冬越しの様子を観察しました。
 後半は室内に移動し、「紅花のコースター染」を行いました。「教草」（1873年に開催されたウィーン万国博覧会に出品された資料で、日本の衣食の原料や製造方法を、子供たちに教えることを目的として作成されたもの）に記されている「紅花染」の様子を紹介しました。ここに記載されている染色方法を簡潔にした方法で染色を行いました。きれいなピンク色に染まりました。



○カモフラージュ
 植え込みに隠した人工物を探します。最初は遠くから。徐々に近寄ると置いたものが見えてきます。



○生き物発見ラリー
 ウメノキゴケ。藻類と菌類が共生している複雑な生き物です。大気汚染に弱いので、ウメノキゴケがあるということは、空気が綺麗な証拠。



クヌギカメムシの卵。周りのゼリーは既にこの世にいないお母さんからのプレゼント。孵化した幼虫は、春先まで栄養・免疫がたっぷりのゼリーを食べ、他の生き物よりも先に大きくなります。生存競争に勝つためです！



ジョロウグモの卵のう。白い綿の中に、赤い卵がたくさん入っています。秋によく見かける黄色と黒の縞模様のクモです。クモの卵のうは種類によって形が様々なので、見つけるのが面白いです。



○紅花でコースター染め
 「教草」の「べに一覧」を紹介。昔の紅花染めを紹介しました。コースターの模様をつけでは、どんな模様にしようか？迷います。

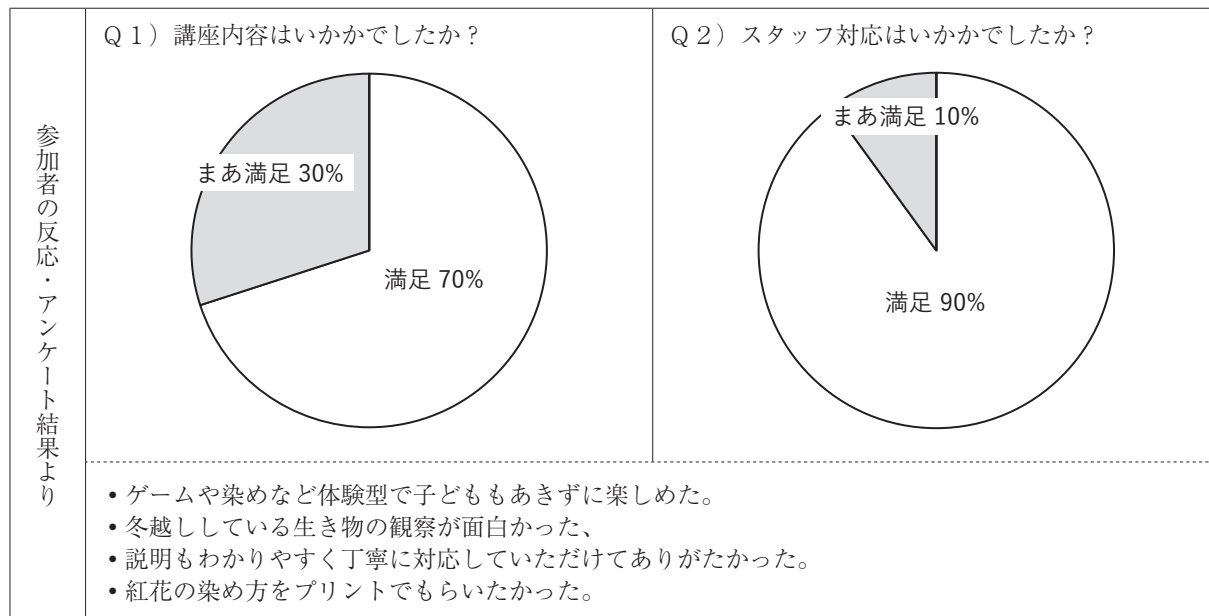


輪ゴムと大豆で模様つけ。この後、紅花液の袋に酢とコースターをいれて揉み込みます。今回は、黄色色素を除いた紅花を使っています。

3-3 参加者の反応

資料4に環境学習センターによる総括・評価、および参加者（保護者）に依頼したアンケート結果の一部を示す。満足度も高く、概ね良い評価をいただいた。

資料4 親子で楽しく自然体験in環境学習センター アンケート分析および評価



4 おわりに

本行事は、コロナウイルス感染症の流行による行動制限期間中においても、中止にすることなく開催することが出来た。様々な制約の中で、スタッフの行動・体調管理の把握を行い、当日に備えた。さらに開催におけるマニュアルを作成し、行事後に感染等が生じた場合にも備えた。同時に参加者にも1週間前からの体調管理等の協力と事後に体調不良が出た際の連絡等を依頼したが、快く協力いただいた。年2回の行事の開催が可能となったのは、参加者の理解や協力も大きく、謝意を表したい。行動制限があった期間は、他の団体による行事等が少ないこともあり、本活動には例年以上に申し込みが殺到したが、今年度よりコロナ前の状況に戻りつつあり、参加者数も落ち着いてきた。

引き続き、より多くの親子と共に自然を楽しむことを願い、活動を継続させたい。

V-5. 宇都宮共和大学・宇都宮短期大学×ミナテラスとちぎ 「大学連携親子ワークショッププログラム」実施報告

V-5-1. 自然を感じよう～花や木の実でアレンジメント

子ども生活学部 教授 桂 木 奈 巳

活動の概略

1. 日 時：5月28日（日）10時30分～11時30分
2. 場 所：ミナテラスとちぎ（宇都宮市インターパーク6-2-1）セミナールーム
3. 参加者：子12名（2歳1名、3歳1名、4歳2名、5歳3名、6歳1名、8歳4名）、保護者11名
4. 担当教員：桂木、田渕
5. 参加学生：学生4名（4年：生出梨紗、3年：根本桃華、2年：天谷優里、山本侑奈）合計29名

活動の内容

1. 内 容：テーマ「自然を感じよう～花や木の実でアレンジメント」自然素材を使い、写真1のアレンジメントを2種類制作した。
2. 事前準備
計2回集合し、打ち合わせと事前準備を行った。
3. 当日のスケジュール
9：15～ 現地集合・準備
10：15～ 参加者受付・入室
10：30～11：20 制作
11：20～11：30 まとめ、アンケート、閉会
11：30～ 掃除・片づけ
4. その他
 - ・現地で学生と教員に昼食弁当配布あり。
 - ・学生に2,000円クオカード支給（大学より）



写真1 ブッタナツのアレンジと木の実のケーキ



写真2 製作の様子



写真3 参加者の作品の一例

活動の様子

この日に使う材料の生活史等の紹介を行った後、参加者には自由に制作いただいた。子どもは材料を選ぶのが楽しい様子で、じっくり考えて作る子、思うままにダイナミックに制作する子等、様々な様子であった。子どもの意思を尊重して補助をしている保護者の様子が好ましかったが、保護者が熱中して制作する家族もあった。同じ材料でも様々な使い方があり、こちらにも新たな発見があった。

学生の手際も連携も良く、参加者の制作の様子を見て、不足する材料の案内をしてくれた。制作終了した参加者の子どもを「カエデ種子模型とばし」に誘って対応してくれた。

仕上がった作品はどれも華やかで見栄えがした。

以上

V-5-2. つくってあそぼう！－おうちにあるもの大変身－

子ども生活学部 准教授 市川 舞

活動の概要

1. 日 時 令和5年9月24日（日）10：30～11：30
2. 場 所 ミナテラスとちぎ（栃木トヨタ自動車）宇都宮市インターパーク6-2-1 セミナールーム
3. 参加者 7家族18名（保護者9名、0歳1名、2歳3名、3歳2名、4歳1名、5歳2名）欠席：2家族
4. 担当教員 市川、星
5. 参加学生 西川綺華、根本桃華、田崎明優美、櫻井寿成（子3年）、恩田穂乃花、柴田真月（子2年）

活動の内容

1. テーマ 「おうちにあるもの大変身」 家庭にあるモノや廃材を教材化し、特性を活かして遊びをつくる。
2. 事前準備 9月20日（水）～9月21日（木）2日間 教材研究、事前準備を行った。
3. 当日のスケジュール
9：00 現地集合、会場設営、教材搬入
9：30 環境構成
10：15 受付開始
10：30 活動開始
11：30 活動終了、参加者解散、片付け
12：00 学生・教員解散
4. その他
・学生にボランティア基金クオカード@¥2,000支給
現地で学生・教員に弁当配布



写真1 触って、試す



写真2 的をねらって！



写真3 わたしのコース

活動の様子

洗濯ばさみ、空き容器、ガムテープの芯、段ボール片など、生活に身近なモノを教材化した。家庭にある生活用品や廃材の「量」を用意することで、集める、分ける、並べる、積む、組み合わせるなど、子どもたちは多様な関わり方を試みており、活動を通して教材の特性や仕組みに気付き、活かしながら遊びを展開する姿があった。

「空気砲」や「車」づくりでは、作った後さらに段ボール片でコースを作ったり的をつくったりと、子ども自らイメージやアイデアを広げながら教材を組み合わせ、遊びを考え作り出す姿があった。また、教材とかかわる過程において、なかなかイメージする形にならない我が子の様子にもどかしそうにする保護者の姿もあったが、親子で一緒に取り組んだり子どもの姿を学生が積極的に認めたりする様子を目にしながら、その子どものよさ－意欲、粘り強さ、考える力、イメージを表現する力など－を再発見している様子だった。

学生からは、教材研究や環境構成／再構成の重要性を改めて認識した、実習等では経験しない親子での活動の様子を間近で学ぶことができる機会となった、等の感想が寄せられた。 以上

V-5-3. 「親子リトミック」

子ども生活学部 専任講師 大 島 美知恵

1. はじめに

リトミックは日本においては幼児教育、療育、地域の子育て支援事業等の中に広まりつつあり、また「習い事」としても楽器を習う前の音感教育として普及してきている。この親子リトミックの活動は企業の地域コミュニティ施設と連携し、2歳～5歳の子ども達を対象に年3回のペースで2年間、そして今年度は年2回行ってきた。リトミックの活動を通して地域の親子と学生たちとの交流を推進し、その交流によって親子共々楽しめる場となること、学生にとっては地域の親子に対する関わりを通して、保育者としての視点を学ぶ場となることを目的としている。

2. 活動概要

- (1) 日 時：2023年7月16日（日）
2024年2月18日（日）
10：30～11：15 ワークショップ
11：15～11：30 ミニ講座・絵本の読み聞かせ
- (2) 会 場：ミナテラスとちぎ（宇都宮市インターパーク
6-2-1）セミナールーム
- (3) 対象者：2歳～未就学児をもつ家族（父親・母親・子ども）
親子合わせて20名程度
参加人数 7月16日（子12名、保護者12名）
2月18日（子20名、保護者18名）
- (4) 参加募集と受付：栃木トヨタが窓口
- (5) 参加学生：毎回6名の学生が参加した。リトミックの授業で学生に呼びかけて参加を募った。



3. 活動の内容

- (1) 各回のテーマ
7月16日「いろんな音と動きで遊ぼうリトミック」
2月18日「親子でふれあい、ほんわかリトミック！」
- (2) 事前準備
毎回4～5回の打合せと練習を行った
第1回：企画・担当決定
第2回：ワークショップの流れを確認、学生担当部分の練習
第3回：教材製作
第4回：ワークショップの流れを確認、学生担当部分の練習
第5回：最終打ち合わせ
- (3) 当日のスケジュール
9：00 現地集合、抗原検査実施
9：30 会場の設営と準備



- 10：15 参加者受付
- 10：30 ワークショップ開始
- 11：15 保護者向けミニ講座（教員）絵本の読み聞かせや遊び（学生）
- 11：30 終了、参加者は解散。掃除・片づけ
- 12：00 学生・教員解散

4. 活動の様子

各回共に季節の風物詩を題材とし、視覚教材を入れたパネルシアターや身体活動、楽器活動を行った。昨年度まではコロナ禍の中で、できるだけ他の親子との接触を避ける方法の活動を行ってきたが、今年度は参加している親子同士の関りを幾らか取り入れながら進めてきた。また紙や布などの素材を利用し、リズム・音の高低・ニュアンスなどを感じ取り、親子それぞれの表現を楽しんでもらう活動も多々取り入れ、楽しんで頂いた。

毎回、低年齢のお子さんはキャンセルが出ていたことから、2月のワークショップはあらかじめ人数を多く受け付けたが、1人もキャンセルが出ないという他の講座も含め初めての事態となった。人数が多すぎて圧迫感を感じ、活動の中に入れず端の方で保護者と参加するお子さんもいたので、受付人数について来年度は考慮していきたい。

学生たちは、教材の制作やアシスタントとしての練習、ダンスの音源編集などで得意分野を活かして協力してくれた。当日も笑顔を絶やさず親子に接してくれていた。また保護者がミニ講座を聴いている間には、子どもたちに絵本の読み聞かせや遊びの提供を行い、主体的に活動できていた。常に笑顔で積極的に関わっていた。

5. 保護者アンケート

昨年度に引き続き、子どもがとても楽しそうに活動できていた。子どもだけではなく、親も一緒に楽しめた。という声を多数聞くことができたが、やはり2月のアンケートでは、以前のリズムミックが楽しかったが、今回は子どもが楽しめていなかったとのこと意見が1件あった。既述のように受付人数を考慮すると共に内容についても更に検討していきたい。

6. 学生アンケート

授業で経験したリズムミックを学生が直に子ども達と体験できる貴重な機会となっていることが伺える。練習から本番まで教員と共に一緒に活動することで、臨機応変に子どもの様子を見ながら流れや内容を変更することについても学べて良かったとの声があった。また実習ではなかなか機会がない親子の関わりを観察することで、保育者の視点から学びを深めている様子も伺えた。

7. まとめ

リズムミックの活動を通して、親・子・学生が共に楽しみ、学び合う時間になっていたことが伺える。今後はコロナ感染対策の緩和を視野に入れ、親子同士、学生との交流を積極的に行っていきたい。更に安心な状態が確保できれば、「息」を使った遊び、「吹く楽器」、長らくマスク下で刺激が少なくなっているであろう「表情遊び」なども活動に取り入れていきたい。

VI. 宇都宮共和大学子ども生活学部 卒業研究

VI-1. 2023年度卒業研究一覧

青木 里濃	運動嫌いの子どもの支援に関する一考察
阿部 由奈	カフェで過ごす時間、空間の魅力
荒井 七星	「憧れ」と「理想自己」についての研究
安藤 茜	外国にルーツを持つ子どもの保育と子ども理解 —子どもを理解するための保育の工夫とは—
伊沢茉奈香	保育における動物飼育の重要性と配慮に関する研究
石戸 優菜	運動の好き嫌いを認知する要因に関する研究 ～集団種目の経験に着目して～
石原 茉歩	恋愛依存と健康行動との関連
伊東 星渚	化粧についての検討 ～なりたい自分になるために～
上澤 実緒	「女性」が「同性アイドル」から受ける影響
海野 史帆	野鳥の「聞きなし」について
生出 梨紗	ろうそく作りが「火育」に及ぼす効果について
大島亜里紗	歌詞とメロディが若者に与える心理的影響
大竹 小雪	パネルシアターと音楽 ～視覚と聴覚の調和について～
大塚 春生	障害者支援施設と家庭との連携について
大友 歩未	推し活が与える心理的効果
小高 瑞樹	恋のパターン化・一目惚れ —少子化問題を解決に導く恋のパターン化—
小宅 彩花	子どもの習い事とその影響
柏木優里奈	アレルギーのある子どもへの思いと認識・理解
加藤 温佳	朗読と音楽 ～音楽が与える効果～
河本 涼加	テレビアニメの規制が子どもに与える影響について —なぜ規制は必要なのか—
菊地 葵	一人一人と丁寧に関わる保育とは —外国にルーツを持つ子どもの保育を担当する保育者のインタビューを通して—
菊池なぎさ	幼少期の絵本体験の記憶と現在の読書への関心
菊地 瑠花	性別の判断基準
國井 優菜	お小遣いから考える子どもの金銭教育
小池 佑佳	保育における「多文化絵本」の意義 —A保育園の4～5歳児クラスでの参与観察を通して—
児玉はるか	習い事と社会の変化の一考察
小林明日香	医療的ケア児に対する遊びに関する研究
近藤 礼萌	ディズニー映画の魅力と効果
齋藤 理桜	保育における土粘土とその指導法
酒井 楓	障害のある子どもへの支援に関する研究 —保育者の困り感に焦点を当てて—

佐久間 壱成	近年におけるサウナブームについて
笹島 彩加	かるたの魅力
鈴木 琴音	女兒向けアニメが子どもに与える心理的影響について
鈴木 希彩	睡眠がスポーツに及ぼす影響
五月女 莉奈	保育実習生の抱えるコミュニケーションの困難さに関する研究
高橋のりか	幼少期の習い事がその後に与える影響
立川 ひかり	虫に興味を持ってもらう方法
田村 千愛希	幼少期の思い出が大学生の自分に与える影響
利根川 沙希	乳幼児期の音楽教育について
富永 ももこ	子どもにバイアスを持たせないための保育の工夫
中島 彩	生活における音楽の活用 一食事に注目して一
野口 佑華	子どもと手作り楽器 一手作り楽器を通した関わり一
能登屋 有香	小1プロブレムの実態と幼児期の援助
橋本 佳奈	パペット製作活動の可能性
平塚 弥優	「推し」がいる生活 一推し活をするにあたってどのような影響があるか
福田 爽夏	幼児期の運動の必要性についての一考察
三柴 奈緒	若者の結婚観・子育て観と職業選択との関連性
築瀬 陽香	推しの魅力とオタクの割合について
渡部 杏菜	幼児に向けた性教育に関する一考察 ～国際セクシュアリティ教育ガイダンスと日本の現状の比較～
渡邊 沙夢	スポーツカー文化の衰退の要因について
渡邊 若奈	音楽聴取における音楽と歌詞の心理的影響

VI-2. 全国保育士養成協議会関東ブロック協議会 第37回学生研究発表報告

主催：全国保育士養成協議会関東ブロック協議会

日程：2024年2月16日（金）

会場：大妻女子大学

「運動の好き嫌いを認知する要因に関する研究～集団種目の経験に着目して～」

宇都宮共和大学 子ども生活学部4年 石戸 優菜

指導教員：霜触 智紀

VI-2. 全国保育士養成協議会関東ブロック協議会 第37回学生研究発表報告

運動の好き嫌いを認知する要因に関する研究～集団種目の経験に着目して～

石戸優菜

(宇都宮共和大学 子ども生活学部 子ども生活学科 4年)

1. 目的

運動やスポーツが楽しいと感じている児童生徒は体力が高く、1週間の総運動時間も多いことが示されている(文部科学省、2019)。特に勝ったり、上手にできたりすることを通して喜びを味わうことなど、人との関わりを通じた活動が楽しさにつながることを示唆されている(スポーツ庁、2019)。

しかし、中学・高校生になると運動が嫌いな人が増加し、運動に対する認知の異なりが生じる傾向にある。スポーツ庁(2018)の「「嫌い」を「好き」に変えるために～学習指導要領改訂〈小中学校・体育〉」では、スポーツ(運動)嫌いは技術面の指導が重視されてしまいそれにより必然的に「できる子」「できない子」に区別されたことが一要因として示されている。そこから、運動やスポーツに苦手意識が生まれ、やがて嫌い、捉えるようになってしまう可能性が指摘されている。なお、2012年には幼児期運動指針(幼児期運動指針策定委員会、2012)が示された。そこでは未就学段階からの運動に対する意識の重要性について述べられ、幼児期からの運動習慣形成に向けた楽しい活動が求められるといえる。

運動の好き嫌いに関連する楽しさについて述べられた先行研究を概観すると、体育授業が楽しかったと回答した人の最大の要因は「友人」であること(澤、2017)、「運動の楽しさ」「心地よさ」「教える楽しさ」は、「運動好き」との間に強い関連が示唆されたこと(永井・日朝、2018)、「運動が苦手である、あるいは体育が嫌いな学生に配慮したグルーピングを行うことや運動遊びに興味関心を持たせ、安心して学び合える友人と積極的に活動できる雰囲気での授業を行う工夫」(丸井・井

邑、2015)が求められること等が示されていた。

以上のことから、運動の好き嫌いの要因には他者の存在等の外的環境要因が関連していることが考えられた。すなわち個人種目よりも集団種目における経験の方が、その後の運動の好き嫌いの認知に影響する可能性が考えられる。しかしながら、運動の好き嫌いの認知について、集団種目経験に特化して言及された研究は見当たらない。

そこで本研究では、なぜ「嫌い」になってしまったかの要因を明らかにするために、大学生を対象に調査を行う。特に本研究においては、知見の少ない集団種目経験に着目し、運動の好き嫌いに関連する要因を探ることを目的とした。本研究の意義として、例えば近年問題視されている子どもたちの運動をする子、しない子の二極化の防止に資することが期待される。

2. 方法

対象者は、北関東にある大学の大学生1～4年生119名とし、インターネットツールによるアンケート調査を実施した。調査内容は、基本的属性、運動の好き嫌いの認知、集団種目経験に関する質問(「私は、集団種目で活躍することが多い」等)とした。解析方法として、Pearsonの積率相関係数を算出した(運動の好き嫌いと集団種目経験に関する質問との関連)。なお、有意水準は5%未満とし、統計処理ソフトは、IBM SPSS Statistics Ver. 28を用いた。

3. 結果と考察

(1) 対象者の運動の好き嫌いの認知

運動の好き嫌いについての回答人数と割合については、非常に好きであるが25人(21.0%)、ど

ちらかといえば好きであるが47人 (39.4%)、どちらでもないが14人 (11.7%)、どちらかといえば嫌いであるが22人 (18.0%)、非常に嫌いであるが11人 (9.2%) であった。今回の対象者は、運動が嫌いな人より好きな人の方が多い傾向であった。

(2) 運動の好き嫌いとは集団種目経験との関連

以下、高い相関係数値を示した事項について記載する。詳細は表1を参照とする。

「私は、集団種目で褒められることが多い」との相関係数は $r=.584(p<.001)$ であった。この結果から、集団種目で褒められることが多いと認知するほど、運動が好きである可能性が示唆された。他の人から褒められることがあると「褒めてくれた人」や、「褒められたこと」がよく感じたり好きだと感じたりすることがある。こうしたことから、集団種目で褒められることが多いと好きだと認識する傾向にあると考える。

「私は、集団種目を通して友達が増えた」との相関係数は $r=.567(p<.001)$ であった。この結果から、集団種目を通して友達が増えたことと認知するほど、運動が好きである可能性が示唆された。小学校から中学校、中学校から高校と学校が変わると友達が変わったり増えたりするように集団種目を行うときもチームメイトも変わっていくので、

友達が増えていく傾向がある。それにより、新しい刺激を受けることやそこから新たな人脈ができてくる。こうしたことから、集団種目を通して友達が増えたと感じる人は好きだと認識する傾向にある。

一方で、「私は、集団種目が苦手である」との相関係数は $r=-.530(p<.001)$ で、負の関連であった。この結果から、集団種目が苦手であると認知するほど、運動が嫌いである可能性が示唆された。集団種目であると周りの人との技術力の差が見えてしまう事がある。それにより、できていないと感じその集団種目が苦手だと認知してしまう傾向が考えられる。

4. 本研究の限界と課題

主な課題は、対象者の人数が少なく、また大学生を対象として調査を行ったことにより、一定の年齢層でしか研究を行うことができなかった。

以上のような限界があるものの、運動の好き嫌いに関連する要因について特に集団種目時の経験に焦点を当てて検討し、その一端を示すことができた。今後、上記の課題を解決しつつ運動の好き嫌いに関連する要因について、さらなる研究が望まれる。

表1. 運動の好き嫌いとは集団種目経験との相関

質問項目	運動の好き嫌いの相関係数 (Pearsonの積率相関係数)	有意確率
私は、集団種目で活躍することが多い	.512**	<.001
私は、集団種目が苦手である	-.530**	<.001
私は、集団種目時に自分の意思をきちんと伝える方だ	.541**	<.001
私は、集団種目時に怪我をすることが多い	.118	.200
私は、集団種目時によく注意をされる	-.023	.802
私は、集団種目のルールがよく理解できないことがある	-.259**	.005
私は、集団種目に褒められることが多い	.584**	<.001
私は、集団種目では努力すればできるようになると思う	.548**	<.001
私は、集団種目を通して友達が増えた	.567**	<.001
私は、集団種目時にプレッシャーを感じることもある	-.122	.185
私は、集団種目の楽しさは指導者に左右されると思う	.047	.611
私は、集団種目の楽しさはチームメイトに左右されると思う	.184*	.046
私は、集団種目において目標とした成績・結果に届かないことがある	.078	.398
私は、集団種目において指導された技術的内容ができないことがある	-.245**	.007
私は、集団種目の試合・ゲームにおいてミスが多い	-.281**	.002
私は、集団種目において勝ち負けは重要な要素だと思う	.264**	.004
私は、集団種目において個人の競技力の向上は大切だ	.191*	.037
私は、集団種目は基本的に楽しいと感じる	.548**	<.001
私は、集団種目時に自分を責めてしまうことが多い	-.140	.128
私は、集団種目時の成功体験が多い方である	.425**	<.001
私は、集団種目時に怒られることが多い	-.298**	.001
私は、集団種目では他者のためなら自分を犠牲にできる	.222*	.015
私は、集団種目時に他者の言葉がけに影響を受けやすい	-.015	.871
私は、集団種目時に他者の意見に耳を傾ける	.285**	.002

資料

I. 2023（令和5）年度 子育て支援研究センター事業報告

I. 主催事業

1. 子育て支援研究センター公開講座

第39回 10月28日（土）

気になる子どもの理解と支援

参加者23名（一般）

2. 地域の就学前施設との交流を取り入れた保育者養成教育

(1) 「子どもの森」を活かした交流保育

1-1 ① 認定みどりこども園 交流保育

1) 日 時 2023年5月31日（水）1-2限

2) 場 所 長坂キャンパス 子どもの森

3) 参加者 認定みどりこども園 年長児53名、引率保育教諭5名、主任1名、運転手2名
子ども生活学部2年生46名

4) テーマ 春の自然に親しむ

1-2 ② 認定しらゆりこども園 交流保育 第1回

1) 日 時 2023年6月1日（木）1-2限

2) 場 所 長坂キャンパス 子どもの森

3) 参加者 認定しらゆりこども園 年中児96名（4クラス）、引率 保育教諭9名
子ども生活学部1年生54名「フィールドワーク」「保育内容総合演習Ⅰ」

4) 主担当 桂木、市川

5) テーマ 春の自然に親しむ

1-3 ③ 認定しらゆりこども園 交流保育 第2回交流保育

1) 日 時 2023年11月22日（水）1-2限

2) 場 所 長坂キャンパス グランド

3) 参加者 認定しらゆりこども園 年中児96名（4クラス）、引率 保育教諭9名
子ども生活学部1年生54名「フィールドワーク」「保育内容総合演習Ⅰ」

4) 主担当 桂木、市川

5) テーマ 秋の自然に親しむ

(2) 4年生による教材提案型の交流保育 -つるた保育園との交流保育-

2-1 ④ 第1回交流保育（保育参加・観察）

1) 日 時 2023年4月11日（火）～14日（金）10:00～11:30

2) 場 所 つるた保育園（宇都宮市鶴田町3361-22）

3) 参加者 子ども生活学部4年生「保育内容総合演習Ⅳ」履修者46名
（4グループに分かれ、上記日程一日1グループ参加）

引率 市川、田渕、桂木、小野、星

4) テーマ 園生活における子どもの実態（発達、興味・関心など）をとらえる

2-2 ⑤ 第2回交流保育 5歳児クラスとの交流保育

1) 日 時 令和5年4月26日（水）1-2限

2) 場 所 長坂キャンパス 雨天によりアリーナ

3) 参加者 つるた保育園 5歳児クラス36名（4/26） 引率保育士4名
子ども生活学部 4年「保育内容総合演習Ⅳ」履修者53名

4) 主担当 市川、田渕、桂木、小野

5) テーマ いろいろな遊びに親しもう

2-3 ⑥ 第3回交流保育 4歳児クラスとの交流保育

1) 日 時 令和5年5月10日（水）1-2限

2) 場 所 長坂キャンパス グランド

3) 参加者 つるた保育園 4歳児クラス30名（5/10） 引率保育士4名
子ども生活学部 4年「保育内容総合演習Ⅳ」履修者53名

4) 主担当 市川、田渕、桂木、小野

5) テーマ いろいろな遊びに親しもう

2-4 ⑦ 第4回交流保育 3歳児クラスとの交流保育

1) 日 時 令和5年5月17日（水）1-2限

2) 場 所 長坂キャンパス グランド

3) 参加者 つるた保育園 3歳児クラス30名（5/17） 引率保育士4名
子ども生活学部 4年「保育内容総合演習Ⅳ」履修者53名

4) 主担当 市川、田渕、桂木、小野

5) テーマ いろいろな遊びに親しもう

(3) 3年生による教材提案型の交流保育 - 4園との交流保育 -

3-1 ⑧ 認定しらゆりこども園との交流

1) 日 時 2024年1月10日（水）1-2限

2) 場 所 長坂キャンパス アリーナ、グラウンド（雨天時 アリーナのみ）

3) 参加者 認定しらゆりこども園 年中児96名（4クラス）、引率 保育教諭10名
「保育内容総合演習Ⅲ」履修者3年生46名

4) 主担当 桂木、市川、月橋、小野

5) テーマ 伝承遊びに親しむ

3-2 ⑨ 認定みどりこども園との交流

1) 日 時 2024年1月17日（水）3-4限

2) 場 所 認定みどりこども園

- 3) 参加者 認定みどりこども園 年少、年中、年長児1号、2号認定の幼児
「保育内容総合演習Ⅲ」履修者子ども生活学部3年生 15名
- 4) 引 率 桂木、市川
- 5) テーマ 伝承遊びに親しむ

3-3 ⑩ 認定こども園釜井台幼稚園との交流

- 1) 日 時 2024年1月17日(水) 3-4限
- 2) 場 所 認定こども園釜井台幼稚園
- 3) 参加者 2号認定の年少児、年中児、年長児
「保育内容総合演習Ⅲ」履修者子ども生活学部3年生 16名
- 4) 引 率 小野、杉本、田淵
- 5) テーマ 伝承遊びに親しむ

3-4 ⑪ 風と緑の認定こども園との交流

- 1) 日 時 2024年1月17日(水) 3-4限
- 2) 場 所 風と緑の認定こども園
- 3) 参加者 年少児、年中児、年長児の2号認定の子ども
「保育内容総合演習Ⅲ」履修者子ども生活学部3年生 15名
- 4) 引 率 小野、杉本、田淵
- 5) テーマ 伝承遊びに親しむ

3. Tiny (障がいのある子どもと家族の支援)

(1) ふれあいTiny隊 (障がいのある子どもたちとのふれあい遊び)

児童発達支援・放課後等デイサービス ピース

7月8日(土) 利用児童7名 職員5名 保護者5名

(2) 第49回Tiny (障がいのある子どもと家族のためのあそびの集い)

3月2日(土) テーマ:音楽遊び〜♪

子ども12名 保護者8名

(3) 第11回Tinyファミリーコンサート

～障がいがあってもなくてもみんなが楽しい音楽の集い～

日時:11月4日(土) 13:30～

場所:須賀友正記念ホール

ローズベルミュージック/嘉山晶子氏・竹山千尋氏

来場者 82名

(4) 彩音祭でのワークショップと展示活動

4. 親子遊びの会 ―子育てネットワークづくり―

第1回（第49回） 5月13日（土） 本学アリーナ
「ミニミニアスレチック」 参加者 子ども11名 保護者8名

第2回（第50回） 11月4日（土） 本学アリーナ
大学と地域の子育てサークルとの協働の試み
「親子リズム遊び」「助産師講師による性教育についての講話」
参加者 子ども23名 保護者15名

第3回（第51回） 12月3日（日） ミナテラスとちぎ
「お正月遊び」 参加者 子ども16名 保護者19名

令和5（2023）年度 栃木県「社会貢献青少年等」受賞

5. 卒業生のためのリカレント教育

3月16日（土）実施 卒業生8名（8期生3名，9期生5名）

II. 地域貢献事業

1. 那須塩原市民大学 宇都宮共和大学連携講座

前期2講座（シテイ1・子ども1）

8月30日（水） 市川先生「子どもと育つ～乳幼児期の子育て・子育て」
参加者親子7組

2. とちぎ子どもの未来創造大学

「アイ（藍）でマイ箸袋を染めよう！」
7月22日（土） 参加者 18名

3. 大学地域連携活動支援事業 「親子遊びの会」

(1) 子育てサークルとの共同開催会 杉本 小野 田所

① 8月19日（土）

「多胎児を育てる親の困難感や子育て支援のニーズ」に関する研修を実施した

② 10月11日（土）、10月12日（日）

本学で、学生代表と子育てサークルの代表者、教員で打ち合わせを行った

③ 11月4日（土）

「とちぎ多胎ネット」と連携し、Say Smileアカデミーの講師を招き、親子リズム遊びを行った。また、助産師による性教育の講話も実施した

参加者 親15名 子23名 学生18名

④ 12月17日（土）国際子ども図書館を学生と教員が視察

視察に「食育絵本紹介」のチラシを作成した

(2) 栃木県主催 中間報告会

10月26日(木) 代表学生2名

(3) 栃木県主催 年度末成果報告会

2024年2月5日(月) 代表学生3名

4. 令和5年度大学コンソーシアムとちぎ学生&企業研究発表会

12月2日(金)

大学コンソーシアムとちぎ主催学生発表コンテスト「第30回学生&企業研究発表に参加。大学地域連携活動支援事業「親子遊びの会」栃木銀行賞受賞

5. 宇都宮市環境学習センター事業

(1) 「親子で楽しく自然体験in環境学習センター」桂木

7月29日(土)

クリーンパーク茂原東側林地及び宇都宮市環境学習センター1階フロア

参加者 子ども20名 保護者18名 学生16名

(2) 「親子で楽しく自然体験in環境学習センター」桂木

1月20日(土)

クリーンパーク茂原東側林地、宇都宮市環境学習センター1階フロア

参加者 子ども13名 保護者14名 学生5名

6. 親子ネイチャーフィーリング事業 NPOうつのみや環境行動フォーラム

桂木

8月5日(土) 宇都宮共和大学内 子どもの森、図工室、グラウンド

参加者 子ども22名 保護者19名 学生9名

11月25日(土) 宇都宮共和大学内 子どもの森

参加者 子ども8名 保護者6名 学生7名

7. 宇都宮共和大学・宇都宮短期大学×ミナテラスとちぎ 大学連携親子ワークショップ

6回開催

①5月28日(土) 桂木 「自然を感じよう～花や木の実でアレンジメント」

参加者 子ども12名 保護者11名

②7月16日(土) 大島 「いろいろな音と動きで遊ぼうリトミック♪」

参加者 子ども12名 保護者12名

③9月24日(土) 市川 「おうちにあるもの大変身」

参加者 子ども9名 保護者9名

④11月26日(土) 月橋 霜触「忍者になって修行でござる」

参加者 子ども15名 保護者14名 学生6名

- ⑤12月3日（日） 杉本 小野「つくって遊ぼう！～お正月遊び～」(親子遊びの会)
参加者 子ども16名 保護者19名
- ⑥2月18日（土） 大島「親子でふれ合いほんわかリトミック」
参加者 子ども18名 保護者12名

Ⅱ. 2023年度専任教員の社会貢献活動（子ども生活学部）

職 位	教員氏名	委嘱の内容		
		名称	職位	設置者
学長	須賀 英之	[各種審議会・委員会委員等]		
		栃木県私立学校審議会	会長代理	栃木県
		栃木県公私立高等学校協議会	委員	栃木県
		栃木県文化振興審議会	会長	栃木県
		栃木県文化功労者選考委員会	委員長	栃木県
		とちぎの元気な森づくり県民会議	会長	栃木県
		「文化と知」の創造拠点整備構想検討委員会	委員長	栃木県
		栃木県信用保証協会外部評価委員会	委員長	栃木信用保証協会
		うつのみや産業振興協議会	会長	宇都宮市
		那須塩原市社会教育委員	委員	那須塩原市教育委員会
		栃木県私立中学高等学校連合会	副会長	
		[団体兼職]		
		大学コンソーシアムとちぎ	副理事長	
		栃木県交響楽団	会長	
		栃木県楽友協会	会長	
		栃木県オペラ協会	理事	
		栃木県文化協会	常任理事	
		うつのみや文化創造財団	理事	
		宇都宮まちづくり推進機構	理事長	
		「よみがえれ！宇都宮城」市民の会	会長	
		宇都宮市中心市街地活性化協議会	会長	宇都宮市
		宇都宮MICEネットワーク	会長	宇都宮市
		宇都宮大学ステークホルダー会議	委員	
		宇都宮市創造都市研究センター	センター長	
		全国音楽療法士養成協議会	理事	
		栃木銀行	社外監査役	栃木銀行
		あしぎん国際交流財団	理事	足利銀行
		宇都宮みずほ研修会	会長	みずほ銀行

学科	職 位	教員氏名	委嘱の内容		
			名称	職位	設置者
子ども生活学科	教授	河田 隆	栃木県子どもの体力向上推進検討委員会	副委員長	栃木県教育委員会
			栃木県幼児期からの運動遊び普及検討委員会	委員長	栃木県教育委員会
			(一社) 栃木県レクリエーション協会	副会長	(一社) 栃木県レクリエーション協会
			公益財団法人宇都宮市スポーツ振興財団	評議員(議長)	公益財団法人宇都宮市スポーツ振興財団
			宇都宮市社会教育委員会	委員長	宇都宮市
			宇都宮市子ども子育て会議	委員長	宇都宮市
			栃木県社会教育委員協議会	評議員	栃木県教育委員会
			公益財団法人栃木県民公園福祉協会	評議員	公益財団法人栃木県民公園福祉協会
			那須塩原市民大学運営委員会	委員長	那須塩原市
			下野市立保育園民営化移管先法人選定委員会委員	委員	下野市
子ども生活学科	教授	杉本 太平	日本関係学会	運営委員	日本関係学会
			日本関係学会研修委員会	委員長	日本関係学会
			埼玉県家庭教育アドバイザー養成研修	講師	埼玉県教育局
			那須塩原市市民大学講座	講師	那須塩原市教育委員会
			那須塩原市子ども未来部養成研修	講師	那須塩原市子ども未来部
			日本子育てアドバイザー養成研修	講師	日本子育てアドバイザー協会
			宇都宮市民大学	講師	宇都宮市
			人間関係HRST研究会	会長	
			令和4年度栃木県幼稚園連合会教育研究大会	助言者	栃木県幼稚園連合会
			日本人間関係学会	理事	日本人間関係学会
日本人間関係学会「人間関係士」資格委員会	委員長	日本人間関係学会			
栃木県家庭教育オピニオンリーダー研修	講師	栃木県総合教育センター生涯学習部			
子ども生活学科	教授	桂木 奈巳	宇都宮市環境審議会	委員	宇都宮市
			第3次宇都宮市緑の基本計画策定懇談会	委員	宇都宮市

子ども生活学科	教授	田淵 光与	令和4年度那須塩原市幼保小連絡協議会	講師	那須塩原市			
			令和4年度「とちぎの幼小カリキュラム接続プロジェクト」	講師	栃木県教育委員会			
			塩谷地区幼稚園連合会教員研修会	講師	栃木市幼稚園連合会			
			栃木県幼稚園連合会資質向上研修(ECEQ)	講師	栃木県幼稚園連合会			
			上三川町幼小連携推進研修会	講師	上三川町			
			令和4年度栃木県幼稚園連合会教育研究大会	助言者	栃木県幼稚園連合会			
			那須塩原市男女共同参画推進会議	委員	那須塩原市			
			令和5年度「とちぎの幼小カリキュラム接続プロジェクト」	講師	栃木県教育委員会			
			令和5年度鹿沼市幼小連携のための研修会	講師	鹿沼市			
			令和5年度日光市幼保小連携推進研修会	講師	日光市			
子ども生活学科	教授	蟹江 教子	宇都宮市男女共同参画審議会	委員	宇都宮市			
			栃木県独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構運営協議会	委員	独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構			
			栃木県職業能力開発審議会	委員	栃木県			
			栃木県男女共同参画審議会	委員	栃木県			
			子ども生活学科	教授	月橋 春美	栃木県キャンプ協会	理事	栃木県キャンプ協会
						栃木県レクリエーション協会	理事	栃木県レクリエーション協会
						宇都宮市冒険活動運営協議会	委員	宇都宮市
						幼児期からの運動遊び普及検討委員会	委員	栃木県教員委員会
						令和5年度「幼児期の運動遊び指導者研修会」	講師	鹿沼市教育委員会
						令和5年度「親子で運動遊び教室」	講師	鹿沼市教育委員会
子ども生活学科	准教授	星 順子	令和5年度「運動遊び体験指導者派遣事業」	講師	那須町教育委員会			
			鹿沼市子ども・子育て会議	委員長	鹿沼市			
子ども生活学科			栃木県保育協議会保育士部会研修会	講師	栃木県保育協議会			

			おやま市民大学子育てサポーター養成講座	講師	小山市教育委員会
			宇都宮市保育課乳児保育研修	講師	宇都宮市保育課
子ども生活学科	准教授	石本 真紀	月の家（宇都宮市要支援児童放課後応援事業）	生活支援	特定非営利活動法人 青少年の自立を支える会
			令和5年度栃木県要保護児童対策地域協議会調整機関調整担当者研修兼児童福祉司任用講習会及び任用前講習会	講師	栃木県
			令和5年度栃木県スクールソーシャルワーカー活用事業スーパーバイザー	スーパーバイザー	栃木県教育委員会
			令和5年度家庭教育支援ネットワーク研修	講師	栃木県教育委員会事務局 芳賀教育事務所
			令和5年度スクールソーシャルワーカー養成研修会	講師	栃木県教育委員会
			令和5年度第2回栃木県スクールソーシャルワーカー研修	講師	栃木県教育委員会
子ども生活学科	准教授	松岡 展世	日本プレイセラピー協会	理事	日本プレイセラピー協会
			栃木県連合教育会 不登校セミナー	講師	栃木県連合教育会
			宇都宮市姿川地区市民センター 親子ふれあい広場	講師	宇都宮市
子ども生活学科	准教授	市川 舞	宇都宮市都市計画審議会	委員	宇都宮市
			芳賀地区研修委員会研修会	講師	芳賀地区幼稚園連合会
			栃木県幼稚園連合会教育研究大会	講師	(社) 栃木県幼稚園連合会
			那須塩原市市民大学講座	講師	那須塩原市教育委員会
子ども生活学科	准教授	新井 祐子	東京藝術大学同声会栃木県支部	会計監査	東京藝術大学同声会栃木県支部
			佐野クラシックコンサート	実行委員	佐野クラシックコンサート
			令和4年度栃木県幼稚園連合会保育テクニカル研修	講師	栃木県幼稚園連合会
子ども生活学科	専任講師	大島美知恵	日本音楽療法学会関東支部	事務局長	日本音楽療法学会関東支部
			リトミック研究センター第一支局・第二支局	指導スタッフ	リトミック研究センター 第一支局・第二支局
			日本音楽療法学会スーパーバイザー養成講座	ファンリテーター	日本音楽療法学会
子ども生活学科	専任講師	霜触 智紀	令和5年度群馬大学地域貢献事業障がいのある子どもたちのスポーツ体験プロジェクト	指導者	群馬大学
			令和5年度「幼児期の運動遊び指導者指導者研修会」	講師	鹿沼市教育委員会
			令和5年度「運動遊び体験指導者派遣事業」	講師	鹿沼市教育委員会
			令和5年度「運動遊び教室」「親子運動遊び研修会」	講師	那須町教育委員会

Ⅲ. 宇都宮共和大学子育て支援研究センター規程

(設置)

第1条 宇都宮共和大学内に宇都宮共和大学子育て支援研究センター（以下、「研究センター」という）を置く。

(目的)

第2条 研究センターは保育・幼児教育・子育て支援分野を中心にした学際的、実証的な調査・研究を行うとともに、地域福祉の向上に資する政策提言を行う。

2 前項の調査・研究の推進によりわが国の保育・幼児教育・子育て支援分野を中心にした理論、政策の発展・向上に貢献するとともに、その成果を本学の教育内容に反映させることにより、本学の教育の充実、高度化を図る。

3 研究成果を地域社会に還元するとともに、地域社会との積極的な交流を図ることにより、地域福祉の向上に貢献する。

(事業)

第3条 研究センターは第2条の目的を達成するため、次の各号に掲げる事業をおこなう。

- 一 保育・幼児教育・子育て支援分野を中心にした自主研究、共同研究
- 二 保育・幼児教育・子育て支援等にかかわる受託調査・研究
- 三 保育・幼児教育・子育て支援関連資料、データの収集、整備
- 四 保育・幼児教育・子育て支援等にかかわる政策提言
- 五 保育・幼児教育・子育て支援の人材育成を目的としたセミナー、講座等の開講
- 六 講演会、シンポジウム、公開講座、研究会等の開催
- 七 経営等診断、研修、コンサルティング活動
- 八 大学、研究機関、企業、行政等との交流、連携活動
- 九 研究年報、研究レポート、A研究成果等の発刊
- 十 その他第2条の目的達成のために必要な事業

2 前項に規定する自主研究、共同研究及び受託調査・研究は、次の各号に定めるところによる。

- 一 自主研究 当該研究に携わる研究者の過半数を研究員が占める研究で研究センターの研究費を用いて実施する研究
- 二 共同研究 研究費の全部または一部を研究センター以外の諸組織、機関等の研究助成を受けて実施する研究
- 三 受託調査・研究 研究センター以外の諸組織、機関からの委託等を受けて行う調査・研究

(組織)

第4条 研究センターは、子育て支援研究センター長（以下、「センター長」という。）及び教授会から選出された研究員並びに本学学長（以下、「学長」という）が任命する事務職員によって組織する。ただし、事務職員は必要に応じて置くものとする。

2 センター長は、本学専任教員の中から、学長が任命する。ただし、学長が必要と認める場合は、本学専任教員以外の者を任命することができる。

3 研究センターに、副センター長及び運営委員長を置く。副センター長及び運営委員長は、研究員の中から学長が任命する。ただし、副センター長は置かないことができる。

- 4 センター長，副センター長，運営委員長及び研究員の任期は2年（年度基準）とし，再任は妨げない。
- 5 学長，副学長および学部長は，研究センターの事業に関し，指導，助言を行うことができる。
- 6 研究センターにおける研究に必要な場合，専任教員以外の研究者を客員研究員として研究に参加させることができる。客員研究員は，センター長が任命し，任期は対象となった研究等の完了時を上限とする。
- 7 研究センターの発展のため，学外の研究者，経営者等に名誉顧問，研究顧問を委嘱することができる。名誉顧問，研究顧問の委嘱は学長が行い，任期は2年とし，再任は妨げない。
- 8 前項の顧問は研究センター長の求めに応じて，研究センターの事業に関し助言，指導等を行う。

（運営）

第5条 センター長は研究センターを統括し，副センター長はこれを補佐する。

- 2 研究センターを運営し，諸事業を遂行するため，運営委員会を置く。運営委員会は運営委員長が主宰し，運営委員長が指名する数名の研究員を運営委員とする。運営委員長は運営委員の中から，必要に応じて副運営委員長を指名することができる。
- 3 研究センターの事業や活動を検討するため，全研究員参加の研究員会議を必要に応じて開催することができる。研究員会議はセンター長が召集し，主宰する。

（運営委員会の業務）

第6条 運営委員会は，研究センターの円滑な運営を図るため，次の業務を行う。

- 一 各年度の事業計画の策定及び予算原案の作成
- 二 研究員から提出される自主研究，共同研究及び受託調査・研究の企画書，予算案査定
- 三 保育・幼児教育・子育て支援等にかかわる政策提言の検討
- 四 第3条第1項第五号から七号までに掲げる事業の企画，運営，実施
- 五 研究年報，研究レポート，研究成果等の刊行，発表
- 六 研究センターの施設・設備，資料等の整備及び管理
- 七 その他研究センター運営に必要な業務

（予算及び会計処理）

第7条 研究センターの予算は次の収入による。

- 一 各年度の本学予算に定められた研究センター経費
 - 二 第3条に定められた受託調査・研究等の諸事業による収入
 - 三 寄付金
 - 四 その他の収入
- 2 受託調査・研究等に関する予算配分・原稿料等の基準については別に定める細則によるものとする。

第8条 予算執行にかかわる会計処理は本学の同規程を準用する。ただし，出張旅費等については，名誉顧問，研究顧問及び客員研究員にも適用されるものとする。

附 則

この規程は平成31年4月1日から施行する。

IV. 宇都宮共和大学客員研究員に関する要領

(趣旨)

第1条 この要領は、宇都宮共和大学都市経済研究センター規程第5条2及び子育て支援研究センター規程第5条2における客員研究員の取扱い等に関し、必要な事項について定めるものとする。

(称号の付与)

第2条 宇都宮共和大学都市経済研究センター及び子育て支援研究センター（以下「センター」という。）は、優れた知識、技術及び経験を有し、本学の研究・教育の充実発展に資すると認められる者に客員研究員の称号を付与することができる。

(指名)

第3条 客員研究員は、センター長が指名し、教授会に報告するものとする。

(付与期間)

第4条 客員研究員の称号は、年度ごとに付与する。ただし、年度途中の場合は、当該年度内の付与とする。

2 客員研究員の称号の付与期間は1年とし、再任を妨げない。

(施設の利用)

第5条 客員研究員は、学長の許可を受けて本学の施設等を利用することができる。

(遵守事項)

第6条 客員研究員が、本学において研究・教育に従事する場合は、本学の諸規則等を遵守するものとする。

2 客員研究員が、故意又は重大な過失によって本学に損害が生じたときは、客員研究員はその責めを負うものとする。

(謝金)

第7条 本学は、必要と認める場合、客員研究員に謝金を支給することができる。

2 前項に規定する謝金については、別に定める。

(交通費)

第8条 本学の依頼に基づき出張する場合は、交通費の全部又は一部を支給することができるものとする。

(称号の取消)

第9条 客員研究員が、本学の名誉を著しく傷つける行為をした場合は、センター長は客員研究員の称号を取り消すことができるものとする。この場合、教授会に報告するものとする。

(雑則)

第10条 この要領に定めるもののほか、客員研究員の取扱いに関し必要な事項は、センター長が別に定めるものとする。

附 則

この要領は、平成25年11月1日から施行する。

子育て支援研究センター運営委員会（2023年度）

センター長 田渕光与
運営委員長 石本真紀
運営委員 杉本太平 星順子 大島美知恵 小野貴之
客員研究員 高柳恭子 土沢薫 今村麻子 田所順子
名誉センター長 牧野カツコ

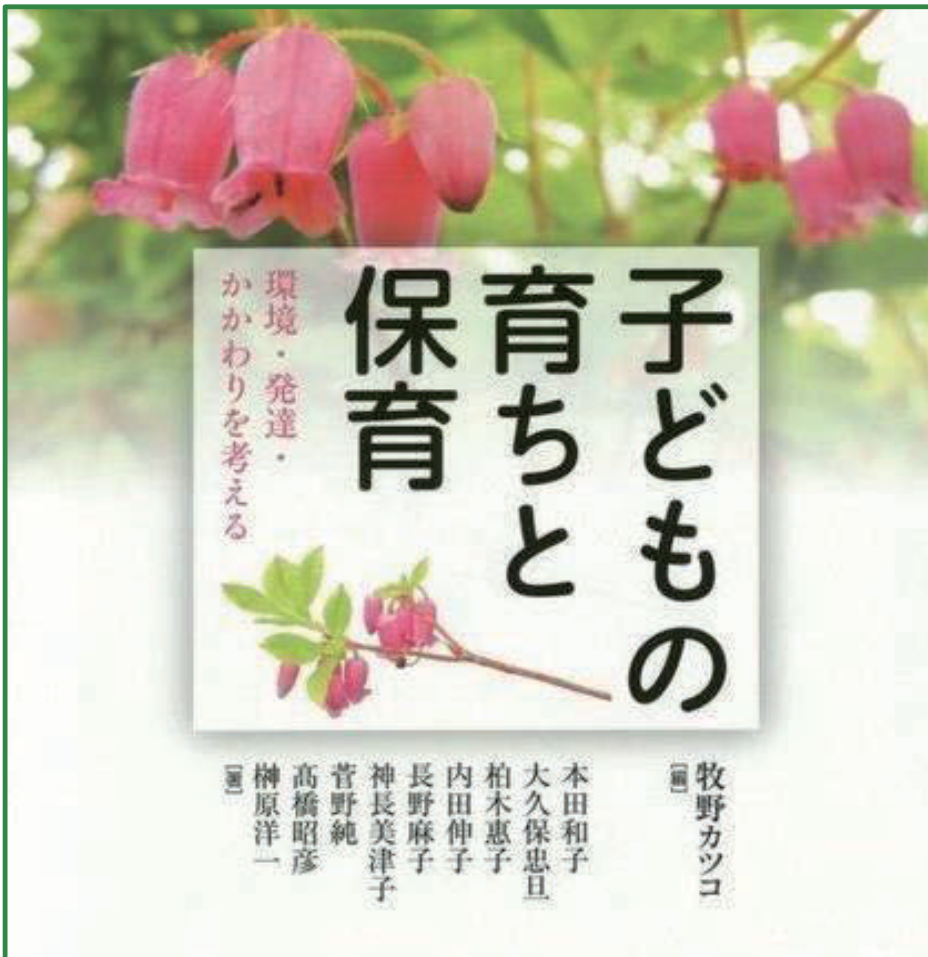
第14号編集担当 小野貴之

表紙デザイン 近江智子

研究センター年報 第14号

発行日 2024年3月31日
編集・発行 宇都宮共和大学子育て支援研究センター
〒321-0346
宇都宮市下荒針町長坂3829
TEL 028-649-0511(代)
FAX 028-649-0660
e-mail : kosodate@kyowa-u.ac.jp
Website : <http://www.kyowa-u.ac.jp>
印刷 株式会社 松井ビ・テ・オ・印刷
定価 1,000円（消費税込み）

宇都宮共和国子ども生活学部 子育て支援研究センター公開講座の記録が 装いを新たに、金子書房から出版されました。



目 次

I部 子どもの育つ社会・環境を 考える

1. 子どもへのまなざし
2. 子どもの成長と自然
3. 子どもが育つ条件

II部 子どもを育むかかわり方 を考える

4. 子どもの創造的想像力を育む親の役割
5. ことばと呼吸と音楽
6. 幼児期から児童期への教育

III部 気になる子どものケアを 考える

7. 生涯発達の心の基礎づくり
8. 医療的ケアが必要な子どものレスパイトケア
9. 気になる子どもと脳科学

人とのかかわりや自然から学ぶことの大切さ

子どもが安心して育つために必要なことを子育て支援の専門家らが提言。
お母さんにまかせきりにしない子育て、幼児期から児童期へのなめらかな接続、発達障害について知っておきたいことなど、いま、保育に求められる子どもの見方・かかわり方がわかる。

金子書房

定価 本体 2300 円＋税

表紙の写真は、栃木県那須高原で絶滅が危惧されているウラジロヨウラクというつつじの仲間です。本学名誉教授・元副学長 大久保忠旦先生が花の開花時期を見計らって那須高原に4回も足を運んで撮影されたものです。(本文 35 頁参照)

